
【グラウンド・ゼロ】

山本真吾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【グラウンド・ゼロ】

【Nコード】

N2007R

【作者名】

山本真吾

【あらすじ】

「わたしにネットゲームのことを教えてくれないか？」と、ある日の昼休み、久瀬大和に頼んできたのは、藤堂グループの令嬢で真正銘のお嬢様である藤堂桃子だった。彼女はネットゲ廃人である兄を更生させるため、世界最大クラスの規模を誇るMMORPG【グラウンド・ゼロ】をプレイするのだと言う。しかし桃子はゲームのことなど何も知らないド素人であり、対して、兄の方は巷で伝説とまで呼ばれているハイランクプレイヤー。果たして大和は、桃子に伝説越えをさせるまでに育て上げることができるのか という物

語です。特にファンタジーな要素はないので「ログアウトすること
ができなくなつた!？」とか「ゲームオーバーになれば命を落とす、
だと……?」などの展開にはなりません。……本当ですよ?

第1話

「でか……」

と、久瀬大和はアホ面を晒して絶句する。

目の前には、身の丈の倍はある巨大な鉄の門。その奥には見事な桜並木が列を成し、石畳を桃色の花びらで埋め尽くしている。そして視線の突き当たり、百メートルはある歩道の先には、西洋風の豪華な館が聳え立っていた。

極々平凡な家庭で生まれ育った一庶民である大和としては、思わず周りを見渡してここが日本であると再確認せずにはいられなかった。

ふざけたことに、大和の実家よりもガレージの方が大きいのだ。無論、その中には目玉が飛び出るような価格の高級車がずらりと並んでいるのだろう。そのうちの一台だけで、久瀬家の全財産など消し飛んでしまうに違いない。ああ、恐ろしい。

凄まじい貧富の格差に大和は二の句が継げない。この十六年間、自分が暮らしていた家はなんなんだ。犬小屋か？

「久瀬、何をキョロキョロしているんだ？」

拳動不審な大和を不思議に思ったのか、彼女は怪訝な面持ちで尋ねてきた。

「いや、ちよつとな……我が家のみすぼらしさを思うと泣けてきてハハハ……」

大和の乾いた笑いに彼女は小首を傾げた。

まさか、ここまで大金持ちだとは思っていなかったのだ。噂には聞いていたが、ここまでとは。

大和はチラリと傍らの石柱を見遣った。正確には石柱にはめ込まれている表札に、だ。

藤堂。

言わずと知れた、日本が誇る大手ベンチャー企業の藤堂グループ。

その総帥が住まう邸宅の軒先に、今自分は立っているのだ。

そして、大和の隣に佇む少女の名は、藤堂桃子^{とうどうもも子}。

藤堂グループの令嬢であり、大和のクラスメイトであり、今日とある頼み事を申し込んできた少女だ。

事の発端は本日の昼休みにまで遡る。

大和が昼食を終え、自分の席で一息ついていたときのことだ。ペットボトルのお茶で一服している最中、不意に後ろから肩を叩かれた。友人の誰かだろうと思いつつ振り返り、大和は目を見張った。驚きの感情をお茶と共に飲み込む。

そこにいたのは、藤堂桃子だった。

「や、久瀬。今、時間いいか？」

桃子は人懐こい微笑みを浮かべながら言った。大和は「あ？ ああ……いいけど」と曖昧な返事をしながら、顔には出さないよう疑問を抱く。

桃子とは一年、二年と同じクラスで、たまに話すことくらいはあるが特別親しい間柄ではなく、少なくとも休み時間を共に談笑して過ごすほど友好的な関係を築いてはいなかった。いったいなんの用があるのだろうか。

「実は、折り入ってお前に頼みたいことがあるんだ」

「へ？ 頼み？」

「うん」

こくりと頷く桃子を大和はまじまじと見据えた。

黒目がちの大きな瞳、滑らかな頬の線に細い顎先、小ぶりの唇。

そして特徴的な漆黒の長髪。どこからどう見ても、藤堂桃子その人である。

彼女は、この東條学園の中でも指折りの有名人だ。何せ、あの藤堂グループ総帥の娘である。シャーペンの芯から人工島の建設まで

幅広く手がけている、小学生でもご存知の大型ベンチャー企業。年商は千億を優に超えると言われている世界有数の大会社。……正直、スケールが大きすぎて判然としないが、とにかく凄いのだ。

つまり、真正銘、超大金持ちのお嬢様なのである。藤堂桃子という女生徒は。

そんな彼女が、自分なんぞに何を頼むというのか。桃子の緩い顔つきからして重い話ではなさそうだが。もし「お金を貸して欲しいんだ」などと言われたら、大和は二度と新聞やニュースの情報を信じたりはしないだろう。

ある種の不安を覚えながら、大和は固唾を呑んで桃子が頼み事の内容を言うのを待った。

「友達から聞いたんだけど、久瀬はネットゲームとやらに詳しいのか？」

真顔で言われた。度肝を抜かれた、ある意味で。

「……………は？」

「だから、久瀬はネットゲームに詳しいのか、と質問しているんだ。どうなんだ？」

「いや、まあ、そりゃ、そんじょそこらの一般人よりは詳しいと思うけどよ」

「本当かつ？ よし、やった」

桃子は表情を綻ばせると、豊かな黒髪を揺らして笑った。何が嬉しいんだろう。意味不明である。

「じゃあ、悪いんだけどわたしに色々教えてくれないか？ ネットゲームについて。放課後に予定がないなら、是非わたしの家まで来て欲しい」

「来て欲しい……………って、いやいや、ちょっと待て。話の展開が速すぎる。もっと順を追って説明してくれ。なに？ 藤堂はネットゲをやりたいわけか？ しかも俺にその指導をしると？」

「まあ、平たく言えばそうかな」

「あ……………あのな、俺が言うのもなんだけどさ、やめておいたほう

「がいいぜ？」

「ん、なんで？」

「息抜きの趣味程度ならともかく、もしも中毒になったらやばいぞ？俺の知り合いにもいるんだよ、電脳世界にどっぷり浸かつちまうて未だに還つてこない奴が。朝から晩までインしてただひたすらに狩り狩り狩り……あの飽くなき向上心をどうして別の物事に向けられないのかねえ」

大和は溜め息を吐きつつ首を振った。なぜか、桃子も同様の仕種を取った。

「うんうん、そうなんだよ本当に。朝から晩まで部屋にこもりつきりで、わたしが呼んでも全然出てきやしない。ご飯を食べる時間は滅茶苦茶だし、お風呂にも入らないし、不健康すぎる」

「あーわかるわかる。現実よりもゲームを優先した生活リズムになるんだよなあ、連中は……って、誰の話？」

「わたしの兄貴」

あっけらかんと桃子は答えた。

「お前の兄貴ってことは……藤堂グループの息子？」

「当たり前だろう」

「藤堂グループの息子が、ネトゲ廃人やってんの？」

「はい、じん？……うん？ごめん、どういう意味の言葉だ？」

「えーっと、まあ、ヘビィユーザーに対する蔑称みたいなもんだな。ゲームばかりやっていて、生活に支障を来している奴をそう言うんだよ」

「そうなのか。じゃあ、兄貴は廃人だな。間違いなく」

「……そんなに酷いの？」

桃子はうんざりとした調子で首肯した。そして事の顛末を訥々と語りだす。

桃子の兄、藤堂光一郎がネットゲームをやり始めたのは、一年ほど前のことである。当時はまだ暇潰し程度にプレイしていたようだが、次第にのめりこんでいき、半年が経過した頃には立派な廃人と

化してしまう。私生活は崩壊し、通っていた大学は無断欠席を続け、典型的なネトゲ難民に成り下がっているようだった。

まあ、ぶっちゃけて言えば俗に言う二ートに相違ないだろう。家計が家計だけに金銭面においては一切の心配はないだろうが、将来や世間体というものもある。そこらへんのことを桃子の両親はどう考えているのだろうか。

そう訊いてみると、桃子はこう答えた。

「父さんは毎日忙しいから、兄貴に構っている時間なんてないよ。家に帰ってくることで自体少ないし。母さんは……もう半ば諦めてる。だけど、このまま放置していたら兄貴の社会復帰は絶望的になってしまう。だから、わたしがなんとかしなくちゃいけないんだ」

瞳に確固たる意志を宿し、桃子は握り拳を振り回した。

「兄思いなのは大変結構なんだけどよ、それでどうして自分までネットゲームをやるうなんて流れになったんだ？」

「昨日わたしが兄貴の部屋に押し入って説得していたら、こう言われたんだ。『それじゃあ、もしも桃子が俺に勝つことができれば引退しようじゃないか。まあ、一生かかっても無理だと思うけどね？ ハーツハツハツハ』って、居丈高と」

なんとも頭の悪そうなセリフである。

というか、廃プレイヤー相手に桃子が勝つ可能性などあるのか？ 今まで会話から察するに、彼女はネットゲームに詳しいとは到底思えない。藤堂光一郎が言うように、一生かかっても無理な話だろう。彼自身、そんなことくらい承知のはずだ。いや、承知だからこそ吹っかけた無理難題なのか。なんて嫌な野郎だ。

「……お望み通りに、放っておけばいいんじゃない？ 永遠に」
ボソツと提言してみると、桃子は「ダメだ！」と両手で机を叩いた。

「このまま兄貴がダメ人間になっていくのを黙って見ているなんてできない」

「心配するな、そいつは既にダメ人間の境地だから」

大和の言い分に一理あると思ったのか、桃子は押し黙り、しかる後に咳払いを落とす。

「と、とにかく。ダメなものはダメなんだ。久瀬、頼む。わたしはネットゲームなんて右も左もわからないんだ。基本だけでもいいから教えてくれないか？ ……ダメ？」

「……まあ、とりあえずなんのゲームなのかを聞かせてくれよ。俺はMMORPGしかやらないからな。FPSやカードゲームだったら大して役に立つとは思えないぞ」

「えむえむ、おー……？」

「あー、いいからいいから、わからなくてもいいから。ほら、名前。ゲーム名、プリーズ」

「えーっと、んう……ぶ、ぶらいんど……？」

「ブラインド？」

オフィスの窓際に取り付けてあるような日よけを想像してから、ブラインドなんていうオンラインゲームがあったか？ と大和は思考を巡らせた。桃子がぶんぶんと首を振る。

「違う、待て、ちゃんとメモしてきたんだ」

桃子は制服の胸ポケットから生徒手帳を取り出してパラパラとページを捲る。

「そう、【グラウンド・ゼロ】だ。思い出した」

「げっ、グラゼロかよ」

「な、なんだ？ 何か不都合なことがある……のか？」

桃子は不安そうな顔つきで大和に問うた。

【グラウンド・ゼロ】 通称グラゼロ、もしくは爆心地。世界中に千五百万人以上のユーザーを抱える屈指の超大型ネットワークゲームだ。四年ほど前に公開され、美麗な3Dグラフィックに豪華声優陣の採用、創り込まれた世界観などで一躍人気となったMMORPGである。大和も、是非やってみたいと前々から思っていたゲームだ。

しかし、思っているだけで実際に遊んだことはない。

理由は簡単、大和が所持する旧型のパソコンではスペックが低すぎてまともに動かないのだ。以前、試しにプレイしてみたのだが、相次ぐ処理落ちによりオープンニングムービーを見ることすら叶わなかった。だからといって、最新式のパソコンに買い換える資金など持ち合わせていない。目当てのゲームをやりたいのにやれない……ハードディスクにインストールだけは完了しているにもかかわらず、手を伸ばせば届く距離にあるというのに、だ。その事実にいちゲーマーとしてどれだけ心碎かれたか、誰にもわかるまい。

「……ん？」

ふと、思った。

「なあ藤堂、お前さつき、放課後うちに来い的なことを仰っていたよな？ それはつまり、俺に【グラウンド・ゼロ】をやらせてくれるってことか？」

「それはもちろん。わたしだけでどうにかできるとは思えないし」

「よし行こう。行かせていただきますとも、たとえ他の何を捨て置いても、絶対に、絶対に」

「そ、そうか？ ありがとう、久瀬」

不気味な迫力を纏った大和に少々引きながらも、桃子は笑顔を覗かせた。大和もご機嫌である。なんだかさつきまで色々と考えていたような気がするが、一瞬でどうでもよくなった。現金と言いたければ好きなだけ言えばいい。所詮はゲーマー、未知なるゲームへの道が開かれていれば黙って突き進むしかないのだ。それを踏まえて考えると、自分も藤堂光一郎と同じ穴の貉でしかないのか。フツ……と、大和はニヒルに自嘲した。

昼休みの終了を告げる予鈴が鳴り、桃子は「じゃあ、また放課後」と言い残して去っていく。

そして数時間後、大和はカルチャーショックに打ちひしがれることとなるのだった。

第1話（後書き）

はじめまして、ご通読ありがとうございます。山本真吾と申す者です。最近を読むことよりも書くことの方が楽しい今日この頃です。さて、この【グラウンド・ゼロ】はネットワークゲームがテーマのひとつとなっていますが、ゲームの中に閉じ込められたり命を懸けたりすることはありません。ただゲームをやるだけです。本当にそれだけです。なので、スリルとかヒューマンドラマとかそういう燃え展開とは無縁ですので、悪しからず。

第2話

時は戻って、再び藤堂家の門前。

桃子がインターフォンを押すと、両開きの鉄門が自動で開扉を始めた。どういうカラクリなのかと問えば、この門は死角に監視カメラが隠されており、インターフォンを押したのが桃子だと気づいた使用人の者が遠隔操作で開いているとのことだ。いちいち無駄に凄

い。
「そついえば意外だな」

雅やかな桜並木を進みながら大和は呟いた。小さな声だったが、隣を歩く桃子は耳聴く反応した。

「ん？ 何が？」

「いや、藤堂くらいのお嬢様なら、登下校はリムジンで送迎するのが当たり前かと思ってたからさ。普通に歩いて学園通ってたんだな、お前」

「確かに車で送り迎えをしてもらう日もあるが、基本的には徒歩だぞ。毎日毎日車で通学していたら他の生徒からすれば邪魔でしかないだろうし、運動不足の解消にも繋がるしな」

「へえ……偉いじゃん」

「そつかな？」

今まで桃子とロクに会話したこともなかったが、なかなかどうして、親しみやすい。良い意味でお嬢様らしくないのだ。愚かな兄を更生させようと奮起する姿勢も立派だと思う。大和が桃子の立場なら間違いなく見限っているだろう。なぜ血の繋がった桃子の兄がネトゲ廃人などというロクデナシなのか、疑問に思えてならない。

【グラウンド・ゼロ】に釣られてこの場所に足を運んだようなものだが、引き受けた以上はちゃんと桃子に協力しなければなるまい。大和は気を引き締めなおした。

横手に広がる庭園を眺めつつ、桃子と肩を並べて館に向かってい

る途中、玄関から誰かが出てきた。飾り気のないエプロンドレスを身に纏う若い女性だ。あれはまさか、噂に聞くところのメイドさんというやつだろうか。初めて見た。

「お帰りなさいませ、桃子お嬢様」

不思議と耳に心地よい声だ。静々と腰を折るメイドに桃子は「うん、ただいま」と返し、片手に提げていた学生鞆を差し出す。メイドは恭しくそれを受け取ると、柔らかな微笑を大和に向ける。少し緊張。

「こちらの方が電話で仰っていた、ご学友の久瀬大和様でございますか？」

「ああ、そうだ。わたしは着替えてくるから、先に客間に案内してあげてくれ」

「かしこまりました」

再び頭を下げると、メイドは玄関の扉を開けて大和と桃子を館内へと導いた。

そこには開放感あふれる吹き抜けのロビーや床一面に敷き詰められた赤絨毯、壺や絵画などのいかにもなアンティークが待ち構えており、庶民の大和をたじろがせた。まるで映画の世界に迷い込んでしまったような錯覚を起こしてしまう。てんで場違いの場所に来てしまった。

取り返しのつかない粗相をする前に帰った方がいいんじゃないかと半ば本気で思っていると、桃子は「じゃあ後で」大和に告げて曲がり角に消えた。置いてかないで、と大和は声にならない叫びを上げる。

「それでは久瀬様、お部屋にご案内いたします。こちらへどうぞ」

「あつ、はい、お願いします」

「お鞆をお預かりいたします」

「ああ、ああ、これはご親切にどうもありがとうございます」

ぺこぺこ平身低頭しながら言われるがままに鞆を手渡す大和。

まさに日本人という感じの有様だ。不恰好極まりない。もう少し心

に余裕があれば、「いやあ、女性に荷物を持たせるなんて失礼なことできませんよハハハ」と爽やかに応じることくらいはできた……かもしれないのに。

大和が通されたのは、館の入り口から比較的近くに位置する部屋だった。客間とのことだが、その面積はバスケットボールができそうなほど広く、内装は一流ホテルにも引けを取らない絢爛さである。行ったことないけど。

「何かご用件がございましたら、こちらの内線電話にてお申し付けください。それでは、失礼いたします」

最後まで笑顔を保ったままメイドは去っていった。

しかし、まだまだ肩の力を抜くことは許されない。こんな部屋で落ち着けるものか。家具のひとつひとつは気品すら漂わせて大和にプレッシャーをかけてくるのだ。どの什器も見ることから高級そうで、清掃が行き届いているのだろう、ひとかけらの塵も落ちていない。もしこれに傷でもつけようものなら……どうなるんだ？ 人生終了なのか？ 首が飛ぶのか？ そしてコンクリ詰めされたのち東京湾に沈められ……いや、もしかしたら一族郎党皆殺しに……

「……待て待て、もうちょっと冷静になるんだ大和」

大和は大きく深呼吸をして馬鹿げた妄想を打ち消した。

とにかく、下手に動かない方がいい。大和は手近なソファに端っこにちょこんと腰かけ、桃子がやって来るのをただ黙然と待つ。微動だにしない。身動きさえしなければ過失など発生しないのだ。

が、大和は視界の端にあるものを見かけて立ち上がった。

「パソコン……？」

部屋の奥にある重厚な造りの机に、デスクトップ型のPCが鎮座しているではないか。部屋の雰囲気に合わせておらず、何やら異彩を放っている。恐らくは、桃子が電話で客間にパソコンを用意しておくよう事前に指示を出していたのだろう。

何気なくそのパソコンに近づいていき、大和は目を剥いた。

「んがっ。こ、こいつは……最新機種じゃねえか！ おお、すごいえ

！」

大和もこのときばかりは状況を忘れてパソコンにかぶりついた。先月発売されたばかりのモンスタースペックを誇る一品である。大和の持つているパソコンと比べたらその性能差はまさに月とスッポン、新幹線とプラレールくらいかけ離れている。

「こいつさえあればグラゼロもぬるぬる動くんだらうなあ……ああ、やっべ、早くやりてえ」

大和はまだ見ぬ新天地に思いを馳せ、表情を緩ませるのだった。完全に舞い上がっていた大和を悲劇が襲ったのはそのときである。気が抜けていた、としか言いようがないだろう。

唐突に込み上げてきたくしゃみの前兆、目の前のパソコン様を唾で汚すわけにはいかないと咄嗟に回れ右をしつつ両手で口を塞ぐ、その拍子にフラつく足元、傍らに立っていたサイドテーブルに腰がぶつかり、机に載っていた細い壺がぐるぐるぐるん、そして、ガシャン。

「……………」

意識が宇宙に飛んだ。

「……………おお、おお、おおおおおおお！？」

大和の目玉は零れ落ちんばかりにせり出した。絶望的な形相で瞬きを連射しつつ、無残に砕け散った壺の前で愕然とする。夢であると信じたかった。人生終了、人生終了、人生終了という文字が脳内を飛来しては消えていく。大和は生まれて初めて神に祈った。助けてください、と。

「待たせたな、久瀬」

「ヒイヒイヒイヒイ！？」

「えっ？ ど、どうした？」

客間に入ってきた桃子は、金切り声のような悲鳴を上げる大和に戸惑いの目を向けた。

もはや逃げることも叶わぬと大和は諦念し、せめて潔く罪を告白して己への手向けにしようと桃子に懺悔する。それでも、大和には

然るべき処罰が待ち構えていることだろう。かつてのアメリカ大統領ジョージ・ワシントンは、桜の木を切ってしまったことを正直に白状したら許されたというが、世の中そんなに甘くねえんだよと、大和は過去の偉人に向かって怨嗟の念を発信するのだった。

そして、あにはからんや、

「なんだ、何をこの世の終わりみたいな顔をしているかと思えばそんなことか。別に気にすることはないぞ。不注意なんて誰にでもあることだ」

許されてしまった。甘い世の中だった。ワシントン万歳。

大和の危懼はたちまち虚脱感に変わり、その場にへなへなと座り込んだ。

「でも、本当にいいのか？ 高いじゃねえの、この壺」

「そんなことはない、安物だぞ。確か、二千万円程度の品物だったと思う」

「……」

まあ、何も言うまい。

それから桃子は内線で使用人を呼びつけ、割れた壺の後片付けを命じた。早々と現れた二人のメイドは持参した清掃道具を用いて二分と経たずに完璧に処理を終え、一礼をして帰っていった。もはや驚く気にもならない。

ようやく落ち着きを取り戻した大和は、改めて桃子の服装を見遣った。

彼女が着替えたのは、清楚な印象を与える洋服だった。咽喉元までをかつちりと覆った白いブラウスと、派手過ぎないフリルがついたロングスカート、胸元の小さなリボンが控えめな可愛らしさを演出している。これで桃子の髪の毛がブロンドだったら等身大のフランス人形そのものだ。普段は制服姿の桃子しか目にしないのでかなり新鮮だった。

「ほーお、なかなか似合ってるな。お嬢様って感じじゃん」

率直な感想を述べると、桃子は特段照れた様子もなく「ありがと

う」と微笑んだ。

二人は机の前に用意されていたキャスター付きの椅子にそれぞれ座った。

「それじゃ早速教えてくれ。まずは何をすればいい？」

言いつつ、桃子はパソコンの電源ボタンを押した。極小音量のファンが唸り、即座にOSが立ち上がる。

聞くところによるとまだゲームのインストールもしていないとのことなので、大和はマウスを操ってネットワークブラウザを開き、【グラウンド・ゼロ】の公式ホームページに飛んだ。桃子のユーザー登録をなんとか済ませ、ゲームの本体をダウンロードする。尋常じゃない速度でゲージが増えていくが、容量が容量だけにあと五分はかかりそうだった。

「そういや、【グラウンド・ゼロ】のコントローラーはないのか？」

「……うん？」

意味がわかりませんとばかりに桃子は首を傾げた。

「えーっとだな、【グラウンド・ゼロ】には専用のコントローラーがあるんだよ」

「それは、あつた方がいいのか？」

「まあな。別になくてもプレイ自体は可能だが、コントローラーがあつた方が操作しやすい。俺なら、買うね」

「そうか、わかった。それじゃあ今から取り寄せるよ」

席を立ち、入り口横の壁に張り付いている内線電話目指して歩き出す桃子を、大和は呼び止めた。

「いやいや、無理だって。市販してるもんじゃないんだよ。運営している会社のホームページで注文しないと手に入らないんだ」

「……まあ、なんとかなるさ」

桃子はお気楽そうな顔で言い切った。根拠はなんなんだ。内線電話の受話器を持ち上げると、桃子は確認するように訊いてきた。

「その、コントローラーを二人分でいいんだな？」

「二人分取り寄せてどうすんの。このパソコンでゲームをプレイで

きるの一人だけなんだぞ。ふたつあったって無意味でしょ」

「久瀬と一緒に遊べないのか？ そうか……じゃあ、パソコンがもう一台あればいいんだな？」

「え？ まあ、その、うん、そうですね、はい」

その後、大和は金持ちの力というのを更に思い知ることとなる。

どのようなルートを使ったのか、十五分足らずで注文の品は届けられた。数名の執事とメイドが銘々荷物を抱えて現れ、パソコンを設置してLANケーブルを繋ぎインターネットの接続設定を手早く済ませると退出した。

大和は二台のパソコンの間に置かれたふたつのコントローラーを呆然と見下ろしながら自問する。なんつーか、俺、いるの？ わざわざ自分なんぞが桃子に指南せずとも、藤堂家の財力にものを言わせればどうにでもなるんじゃないだろうか。百万円単位で課金すればあつという間にS級の装備を揃えられるだろうし、レベル上げのバイト君でも雇えばPCの前にへばりつく必要もない。キャラの操作は、超高性能のAIプログラムでも組み込めば人間には不可能な超反応プレイングで誰だろうと圧勝してくれる。向かうところ敵なしである。

そう言ってみると、桃子は眦を吊り上げてこう言った。

「ダメだそんなの。わたしの力で正々堂々、勝負しないと」

もっともな話である。

第3話

どうにかこうにか二人が【グラウンド・ゼロ】をプレイ可能になったのは藤堂家にお邪魔してから一時間以上経った頃で、窓の外はうつすらとオレンジ色に染まっていた。

「えー、我々はこれから【グラウンド・ゼロ】の世界へとログインするわけだが。藤堂、当面は俺の指示に従ってプレイしてくれ。わからないところがあつたら適宜質問するように。OK?」

「うん、わかった」

大和と桃子はそれぞれディスプレイと向き合い、コントローラーを握り締めて初プレイに臨んだ。

ステップ1、キャラクターメイキング。

ほとんどのMMORPGに実装されているであろうキャラクターメイキングの機能は、ご多分に漏れず【グラウンド・ゼロ】にも実装されている。ウェブ上で一世を風靡しているだけあって、この時点で他のゲームとは一線を画する多彩なバリエーションが用意されていた。

大和は以前からどのようなアバターにするかは決めるだけ決めておいたので、特に迷うことなくキャラメイクを終わらせた。白銀の長髪に琥珀色の瞳をした、大和とは似ても似つかない超絶イケメンの美青年だ。ニックネームは【暁 月光】。大和が一生懸命考えた、飛び切りカッコいい名前である。

満足のいく出来に仕上がり、ひとりうんうんと頷いていたら、横から桃子が顔を突き出して画面を覗き込んできた。そこに映っている美青年を目撃して、桃子は「うん……?」と眉をひそめる。

「ダメじゃないか久瀬、髪を染めたりなんかしたら。不良のやることだぞ」

「なんだよ、いいじゃねえか別に。こういうのがカッコいいんだよ。わからないかね?」

「わからないよ。……ん、ニックネームは……あかつき、げっこう？ 珍しい姓名だな。暁なのに月光とはこれいかに……。と言うか、日本人なのか彼は、この容姿で」

「……」
「それに、このキャラクターは久瀬にまったく似ていないじゃないか」

「……」
「髪質がサラサラだし目元もキリツとしているし、背も高いし体つきも逞しい。なんでこんな似ていないキャラクターにするんだ？」

「うるせえな文句あんのかよ！ ネットゲでぐらい理想の自分を夢見たっていいだろうがチクシヨウ！ うああああああ！」

「えっ？ ご、ごめん久瀬、泣かないで……」

涙目で憤慨する大和に桃子は困惑気味に謝った。しかし大和の機嫌は簡単には直らない。大人気ないとは自分でも思うが、あそこまでダメ出しされれば腹の虫も騒ぎ出すというものだ。桃子は端正な顔立ちをしているからわからないかもしれないが、人間誰しも美形に憧れるものなのだ。

大和は瞑想をして頭を冷やすと、桃子のディスプレイをチラリと見た。

藤堂桃子がいた。

正確には、桃子にそっくりなアバターがだ。

「……いやいやいや、なんで瓜二つ？」

ツッコみを入れると桃子はさも当然のような顔で、

「だって、このキャラクターはわたしの分身のようなものなんだろう？ だからできる限りわたしに似せようとしたんだが……いけないのか？」

「いけなくはないだろうが、せめて本名をニックネームにするのはやめろつて。いいか、お前は藤堂財閥のお嬢様なんだぞ？ 個人特定余裕でしたって心ない輩に晒し上げされちまう可能性大だ」

「……………??？」

桃子の頭上でクエスチョンマークが旋回していた。

四の五の言わずに変更しなさいと、大和は指導者権限を発動。大人しく従った桃子はニツクネームを【+MOMOT+】に変え、アバターのフェイスパーツも細部を違うものに直した。

ステップ2、ジョブ選び。

【グラウンド・ゼロ】の醍醐味のひとつとして、職業の幅広さというのが挙げられる。その種類は五十を上回り、故にこのゲームではジョブの相性が勝敗の鍵を握ることは珍しくない。

これも大和はあらかじめ何にするか決めていたので悩むことはなかった。

大和が選んだジョブは侍である。

高い攻撃性能と機動力を持ち、切り返し的手段に優れ、何よりも技のモーシヨンがカッコいいジョブだ。キャラクターヴォイスが大和の好きな声優であることも魅力である。耐久力の乏しさやリーチの短さなどももちろん欠点もあるのだが、そこは技術でカバーするでしょう。

問題は桃子の方だ。

「藤堂、お前はどのジョブがいい？」

「そうだな……んー、これがいいな。衣装が可愛くて素敵だ」

「……いや、やめておけ。サマナーとか思いつきり玄人向けのジョブじゃねえか」

「じゃあ、これは？　なんだか楽しそうだけど」

「マジシャンなんて運営がネタで用意したとしか思えんほどのクソジョブだぞ。ダメダメ」

「むう、文句ばっかり……ならばどれにすればいいんだ？」

どれにすればいいんだろう。大和は頭を悩ませる。

彼女にゲームの経験がほとんどないという点を踏まえれば、とりあえずテクニカルタイプのジョブは問答無用で却下にすべきだろう。藤堂光一郎のキャラがどんな職業なのか桃子は知らないらしいので、相性の良いジョブを選ぶこともできない。なので大和は、オールラ

ウンドな立ち回りが可能で比較的操作が簡単なジョブをいくつか選択し、後は桃子の任意で決めさせることにした。

果たして、桃子が選んだのはガンナーだった。

銃士という名前からして遠距離戦に長けたジョブだと普通は思うが、ところがどっこい、ロングレンジからミドルレンジまで対応でき、制空力も高い。むしろ極めてしまえば接近戦の方が強いという意味不明っぷりで、巷ではガンナーの皮を被ったファイターとも言われている。短所は、全体的にパラメーターが微妙という点と決定打に欠けるということだ。

ステップ3、ゲーム開始。

「さあ、いよいよだ……」

とうとう目と鼻の先にまで迫った【グラウンド・ゼロ】の世界に、大和の精神は否が応でも高揚してしまう。今鏡を見たらさぞや気持ち悪いニヤケ面が拝めることだろう。大和は逸る気持ちを抑えきれず右足が高速の貧乏揺すりをしていた。

まず第一にプレイヤーを迎えたのは、【グラウンド・ゼロ】の口ゴだった。次いでオープニングムービーが始まるも、大和はこれを「うっせえ」の一言でスキップ。今度は画面にゲームのマスコットキャラクターを務めるロメリアという少女が登場し、何やらゲーム内の世界情勢について説明してくれるのだが、しかし大和は「はいわかかったわかった」と左クリックを連打して読み飛ばす。こんなものはどうでもいい。こっちは早くゲームをやりたいのだ。

「こら久瀬、折角その子が色々と教えてくれているのに無視するなんて可哀想じゃないか。開発者の人達が頑張って製作したであろう映像も全然見ていないし、失礼だろう」

なぜか桃子に叱られた。

「いやだって、オープニングムービーを含めロメリアの話も全部公式サイトのPVで飽きるほど見たし……」

「いいから、ほら、わたしと一緒に最初から見よう。な？」

「……」

な？ と笑顔で言われては無碍にすることもできず、大和は渋々桃子に付き合う運びとなった。

【グラウンド・ゼロ】の舞台となるのは、数多くの種族が生息しているアルトリアという架空の大陸だ。

まったく違う形で繁栄を遂げた十三の国が存在し、その半数以上が大陸を支配する覇権を賭けて日々を争いに費やしている。プレイヤ―は記憶喪失の旅人として召喚され、その世界を放浪することとなる。純粹にストーリーを楽しむのもよし、どこかの国に所属して戦争に狂うのもよし、ギルドを結成して国と戦うのもよし、コレクターとしてダンジョンに潜り続けるのもよし、遊び方は人それぞれだ。

「つまり、この世界を救えるのはあなたしかいないのです。失われた記憶を取り戻し、大陸に安寧をもたらしてください。どうかどうか……」

とつくのとうに聞き飽きた前口上が終わりを迎え、ロメリアは祈りを捧げるようなポーズのままゆっくりと消えていった。ようやく終了である。桃子は「わかった！ わたしが必ずこの世界を救ってやるぞ！」と律儀にもロメリアに返事までしてやる気満々のご様子だが、本来の目的を忘れてないだろうな。

第4話

物語は、大陸最大の版図を誇る宗主国ペルフェットの片田舎から始まる。

村はずれの森で倒れていたところを村人に発見され、宿屋で目が覚め、記憶喪失が発覚し　という展開がムービーで流される。それが終わると村にモンスターが現れ、プレイヤーは助けられた恩に報いるため一人撃退に出向く、という筋書きだ。これはいわゆるチユートリアルであり、まあ、どんな下手糞でも負ける方が難しいというレベルの敵である。

大和はさっくりと、桃子は少々時間を使って、チユートリアルをクリアした。

これで予定調和はすべて終わり、ここからどうするかはすべてプレイヤーの自由となる。いよいよ冒険の始まりだ。

「……ん、なんだ、もう動かせるのか？」

桃子はコントローラーのスティックをぐるぐる回した。すると、ガンナーの初期装備を着けた【+MOMOT+】が愚直に円運動を始める。その様子は大和のディスプレイにも表示されているが、なかなかシユールな光景だった。

「やーめーろ」

大和は【暁 月光】を【+MOMOT+】の進行方向にぶつけて回転をせき止めた。

「あれ？ お前も近くにいたのか」

「いましたよ、ずっと後ろに。スタート地点はみんな同じ場所なんだからな。というかな、周囲にいるキャラクターの数だけ人に見られてるってことを忘れるなよ。恥ずかしい奇行は慎んで」

「おお、わたしがコントローラーを弄くると久瀬のパソコンでも【+MOMOT+】が動くぞ。なんだか面白いな、あはは」

「ちよっと聞いてよっ」

大和は声を荒げて抗議した。

大和と桃子はお互いにフレンドに登録してパーティを組むとクエスト屋に出向いて難易度レベル1の依頼を受けた。その内容は畑を荒らすモンスターを退治するという単純なものだ。

「いいか藤堂。このクエスト、俺は傍観に徹することにする。お前一人でやってみるんだ。もちろん危なくなったら手を貸すから、焦らず慌てず操作に慣れることを優先しろ」

「う、うん。頑張るぞ」

ちよつとだけ緊張した面持ちで桃子はグッとコントローラーを握り締めた。別に気負うほどの敵は出てこないと思うが。さっきのチュートリアルを横目で観戦していたが、桃子のプレイングは決して悪くなかった。ただ攻撃するだけではなく回避や防御もこなしていたし、コンボもしっかりとできていた。存外、筋が良いのかもしれない。

ところが桃子は思わぬ形で苦戦を強いられることとなった。

「さあ、こい！」

意気込む桃子。彼女の呼びかけに応えるように、待機していた畑にモンスターが出現した。鐘の音が鳴り響くようなSEの後ドーム状のバトルフィールドが展開され、戦闘が開始する。

『チルクスが襲いかかってきた！』

と、画面下のメッセージ欄に文字が走る。

出てきたのは、サッカーボール大の白い毛玉だった。抱き心地が良さそうである。宙にふわふわと浮いており、丸くて大きなお目目がラブリいな生物だ。みゅーと高い鳴き声を発した。戦闘意欲が低いのか、『チルクスが襲いかかってきた！』とか言ったくせに【朧月光】や【TOMOMO】には見向きもせず、無目的に中空を彷徨っていた。また、みゅーと鳴いた。

「スライム的なポジションのモンスターか？ 一部のユーザーに愛されてそうだな。ま、見た目通り雑魚だろう。こんな綿菓子みたいな奴とつと倒しちまおうぜ。な、藤堂。……あれ、藤堂さん？」

全然動き出さない【+MOMOT+】を不審に思っ
て臨席の少女を見ると、何があつたのか画面を食
い入るように見詰めたまま凝固していた。

「おい、どうした」

「……なっ」

「な？」

「なんて、可愛いんだ……」

「はい……？」

恍惚とした表情で頬をだらしなく緩ませる
桃子を、大和は冷え切つた目で注視した。
なに言つてんのこの人。

「も、もつと近くで見たいぞっ」

桃子は【+MOMOT+】をチルクスの目一杯傍
まで近づけた。カメラにチルクスがどアッ
プになって映り込む。目の前に人が立っ
ているというのにもかかわらず、チルクス
は未だに空中遊泳を継続していた。人畜無
害にも程がある。都会の鳩でももうちょつ
と警戒心を持つているだろう。

「おい、藤堂。敵だぞそいつは。攻撃しろや、こら」

「可愛いなあ可愛いなあ持って帰りたい、抱
き枕にしたい……」

「いや、可愛いなあじゃなくてさ。敵だつ
てつっつてんだらうが。

攻撃しようよ、ねえ」

「みゅー、だつて、みゅー。あはは、みゅー
みゅー。そうだ、みゅーと鳴くからミ
ュミュと名づけよう」

「……………」

大和は無言でチルクスをぶつた斬つた。

「あああああああああああああああ！？」

桃子の断末魔に等しい絶叫が迸る。【暁
月光】の強攻撃を受け一撃でHPがゼロ
になつたチルクスは光の粒子となつて散
つていった。その光景をただ見つめるだけ
しかできなかった桃子は暫くの間呆然とし
ていたが、やがて濡れた瞳でキツと大和を
睨んだ。が、すぐ思い直したように眼光を
鎮めて俯いた。

「……そうだな、久瀬が正しい。畑の作物を食い荒らされたら困る人がいるんだ。その原因を看過するわけにはいかない、か……ネツトゲームとはこんなにも過酷なものなんだな」

「……ああ、そうだ」

「うう、早くも心が折れそうだ」

本気で落ち込んでいる桃子に何を言えばいいのかわからず、大和は気まずい空気に耐えながらクエストの完了を待った。しかし待てど暮らせど画面は切り替わらない。もしかしたらまだ敵を倒さなければならぬのだろうかと思っただけ、戦闘開始の効果音が鳴った。

桃子は伏せていた面を跳ね上げる。

「も、もしかしてミュミュがまた会いに来てくれたのっ？」

『インプが襲いかかってきた！』

「可愛くない！」

桃子は容赦なくインプを撃ち殺した。

第5話

モンスターの討伐を終えて村に戻った大和達は、引き続き別のクエストにチャレンジした。他のプレイヤーに邪魔されることなく確実に弱い敵と戦うことができるので、桃子のスキルアップには最適だった。しかしどれも難易度1のクエストなので報酬も高が知れているし経験値の量もしている。

そろそろ別の段階に移行する頃合いだと見た大和は【暁 月光】と【+MOMOT+】のレベルが5になつたところで桃子と対戦を試みることにした。

「え、わたしが久瀬と戦うのか？」

と目を丸くする桃子に大和は言った。

「ああ、そうだ。まあトレーニングみたいなものだよ。俺もまだ、このゲームに関しちゃうインしたばかりだからな。対人戦で細かいシステムを試したいんだ、ちょっと付き合ってくれ。ちゃんと理解して習得しておかないとお前にうまく教えられないだろ？」

「あー、うん、お願いします」

何をやるのかイマイチわかっていないような風情で桃子はぺこりと頭を下げた。

村をはじめ街や城などの居住、生活区域ではイベント及びクエスト以外の戦闘が禁止されているため、大和達はフィールドに出た。そしてパーティメンバーから離脱し、【暁 月光】を桃子の操る【+MOMOT+】に接触させて決闘コマンドを入力する。

『【暁 月光】が勝負を仕掛けてきた！』

桃子のディスプレイに戦闘要請の旨を伝えるメッセージが飛び出す。

この【グラウンド・ゼロ】の戦闘はリアルタイムバトルシステムを採用しており、従来のネットゲームに比べるとかなりプレイヤースキルを要求される仕様となっている。格闘ゲームのような要素を

多分に盛り込んでいて、一瞬でも集中力が途切れたりすればあつという間に攻め込まれてしまう。だからこそ、レベルや装備で劣っている場合でも使い手のテクニクさえ上回っていれば勝機を見出すことができるのだ。

大和は桃子相手にキャンセルコンボやエアリアルレイブ、パリィ、受身などの戦術を実践し、ある程度身についたら桃子にもやってみらった。その他にもガードクラッシュ、削りダメージ、ピヨリ、投げ技に当て身技に設置技、ストライカーによる攻撃など、知りうる限りの知識を伝授した。桃子は始終真面目な姿勢で学習に取り組んでいたが深くは呑み込めていないようだった。

「ううん、よくわかんないぞ……」

「別に今日一日でなんもかんも覚えることはねえよ。追々慣れていけばいい。今は耳に触れる程度で構わないさ」

「そうか？ うん、了解した。それにしても久瀬は凄いなあ、わたしと同じで今日初めてやったばかりなのにとても詳しい。どうしてそんなに知っているんだ？」

「まあ……某所とかでプレイ動画見てたし、ウィキペディアも覗いてたしな。グラゼロの掲示板にも通っていたし、知識だけが先行して身についちまったんだよ」

「そうなのか。偉いんだな。予習は大切だからな、うん」

「予習、ねえ……」

実際は単なる嫉妬と羨望の眼差しだったわけだが。

それから、大和と桃子の実戦形式トレーニングは暫く続いた。

モンスター戦とは違って敵の反撃を気にすることなく落ち着いて練習できるのは対人トレーニングの有り難味だが、どちらかが死ぬたびに最初の村に強制転移されるので、やや面倒だ。大和としては不要な黒星はトータルの勝率に影響するのでご免被りたいところだが、あくまでも優先するべきなのは桃子の都合だ。こうして【グラウンド・ゼロ】で遊ぶことができる現状を、幸運だと思うべきなのである。

夜の帳が下りて窓の外も暗くなり、本日はそろそろお開きにしようかと大和は考えた。

そんな折である。大和が、とんだ難題に直面することとなった。

「ん？ 久瀬、久瀬、あつちにもわたし達みたいにトレーニングしている人達がいるぞ。みんな熱心なんだなあ。わたしも頑張らないと」

「ああ……そつすか」

やる気を新たにする桃子には悪いけど、別に対人戦「トレーニング」というわけではないのだが。実際、遠方のバトルフィールド内で戦う二人のプレイヤーキャラクターはどう考えてもガチ勝負だ。切磋琢磨を目的としているとは到底思えない。一方が、もう一方を容赦もへつたくれもなく猛然と攻め立てている。

「……あん？」

ふと、疑問に思った。

いくらなんでも、一方的過ぎやしないだろうか。

大和はまさかと思い、戦闘中の二人にポインターを合わせてその詳細をチェックした。すると、攻めている側のPCはレベルが38、逃げている側はレベルが2であることが判明した。

対人戦を行うには、どちらかがどちらかに決闘を挑む必要があるのだが、レベル2でレベル38の者に喧嘩を吹っかけるとは思い難い。ということとはつまり、挑んできたのは高レベルの方であつて。

「初心者狩りか？ 趣味悪いな」

呆れるように目を細めた。

「初心者狩りって？」

「言葉のまんま、レベルの低い初心者を狙って狩ることだ。その目的はスコア稼ぎだったり『掘り』だったりと色々あるが……ありやあ一番タチが悪い。たぶん、単なるストレス発散だな」

この【グラウンド・ゼロ】は操作性の面が充実していてレベル差を引っくり返すどんでん返しが度々発生するが、代わりに初心者用サーバーというものがない。そのうえプレイヤーキルをしてもペナ

ルティはなく、しかも決闘を申し込まれたら回避する手段はない。逃走用のアイテムで戦闘開始後に逃れることは可能だが、そんなものの初心者が持つているはずもないだろう。

以上のような理由から、【グラウンド・ゼロ】にはPKが結構な割合で存在しているのだ。

「つまりは……弱い者イジメじゃないか！」

大和の話を聞いて桃子は怒りを露わにした。

「まあ確かにそうだけど、どんなプレイスタイルをするのも個人の自由なんだし、別にいいだろ。褒められたもんじゃないのは間違いないだろうけど」

「何を言っているんだ久瀬！ 弱い者イジメなんて下衆の所業じゃないか！ このわたしが成敗してやる！ そして説教だ！」

「あつ？ お、おい待たんかこら！」

大和の制止を聞かず桃子は【+MOMOT+】を走らせた。

ときを同じくして遠方の戦闘は終わりを向かえ、ヒットポイントが尽きたレベル2のPCは光の渦に飲まれるようにして霧散した。バトルフィールドが消滅して初心者狩りを行っていたPC ニツクネーム【ハルバディア】が悠然と立ち去ろうとしていたところに、【+MOMOT+】は後ろから突進してそのまま決闘にもつれ込んだ。そして惨敗した。

「……まあ、そうなるわな」

わかりきっていた結果だけに、大和はなんとも言えない。

「くうう……つ、わたしの力が及ばないばかりにつ、あんな悪逆非道な輩をみすみす……」

桃子は下唇を噛んで本気の悔しがりようを見せた。何事にも真摯に取り組むことができて、少し羨ましい。とはいえ無謀な突撃を仕掛けたことには呆れざるを得ないが。

『弱すぎワロタw いきがるならもつと相手を選べよバーカww
wwザwwコww乙wwつうえw』

【ハルバディア】から【+MOMOT+】へのメッセージが届いた。

対戦履歴から名前を拾って送りつけてきたのだろう。随分と不愉快な文面である。ネットマナーなど頭の片隅にもない奴なのだろう。

「ん……んん？　なんでこんなに『w』がついてるんだ……文字化け……？　ワロタ？　ぎ、こ、乙……っうえ……？　上？　ん？」

しかし、桃子にはイマイチ伝わっていなかった。だが文言からバカにされていることはわかるのだろう、齒軋り混じりに唸りながら画面を睨みつけている。ちょっと涙目。

「久瀬、お前なら……」

言いかけて、

「いや、なんでもない」

桃子は俯いた。しかし言わんとすることは理解できた。逡巡は数秒。溜め息も数秒。大和は「わかったよ」と呟いて、遠ざかりつつある【ハルバディア】の背中を追った。

「久瀬……？」

「やるだけはやってみるが、負けても文句言っなよ？」

「う、うん」

久瀬大和。【グラウンド・ゼロ】暦、三時間と少々。

これまでのゲームー人生で培った知識と経験をフル稼働し、大和は無謀を弁えながらも、初心者狩り狩りを試みることと相成った。

第6話

決闘前にステータスチェック。HP、そしてスキルを使用するために必要なSP、共に満タンであることを確認。両手の五指を開閉させてストレッチ、首の骨をコキコキと鳴らし、心を落ち着かせて集中力を上げる。

「よし……クールにいかか
いざ、勝負。」

【暁 月光】は【ハルバディア】へと一直線に突き進み、大和は決闘コマンドを入力した。

開戦の鐘の音が鳴り響き、BGMが変わる。大気が煌めきながら硬質化してバトルフィールドを形成する。戦いの場にはそれぞれのPCが二人のみ。紛れもない一対一だ。しかし、そのポテンシャルはかなり差が開いている。それを埋める術はプレイヤースキルしかないだろう。

大和は開幕直後に地を這う斬撃波を飛ばし、バックステップで距離を取った。

【ハルバディア】のジョブは一発一発の攻撃に凄まじい威力を誇る戦士、バーサーカーだ。巨大な斧を振り回し、動きは鈍重だが一撃必殺と呼ぶに相応しいパワーと並外れた体力を持っている。

まだまだレベルの低い【暁 月光】はロクなスキルを覚えていないが、バーサーカーとの相性は決して悪くない……はずだ。

勝利への大前提は、とにかく接近させないことである。インフアイトに持っていかれたら危険というレベルではない。死活問題である。桃子は【ハルバディア】の攻撃を捌くことができず、一閃の下に即死してしまったのだ。同じ轍を踏むわけにはいかない。

が、【暁 月光】のちんけな攻撃力では、ガードの上から斬撃波がヒットしてもHPゲージがドットすら削れない。気が遠くなる。そのうちにSPが尽き、それを見計らって【ハルバディア】が突

っ込んできた。

これはまだ想定の範囲内である。慌てるようなことではない。あくまでも、クールにだ。

【ハルバディア】の戦斧が横薙ぎに襲ってくるのを、大和は間合いを見切つてギリギリでかわし、攻撃後の隙を衝いて申し訳程度のダメージを与え、離脱。典型的なヒット&アウェイだが効果的だ。というか他に勝ちようがない。

避ける。突く。

避ける。突く。

避ける。突く。

大振りの攻撃には先手を打って迎撃。

そしてまた避け、突く。この繰り返しだ。

失敗は許されない。一時も気を抜くことができない。ディスプレイの前で凝視を続ける。緊張しすぎて頭痛がする。酸欠になりそうだ。コントローラーは手の汗でびっしょりだろう。こんな繊細な作業を延々と続けていたら頭の血管が焼き切れてしまいそうだった。だが、未だに【ハルバディア】のHPは五分の一も減っていないかった。やっつてられん。

「頑張れ久瀬！ 頑張れ、勝てるぞ！ 負けるな！」

隣では桃子が必死の声援を送ってくる。ありがたいが、正直、やかましい。しかし今の大和には黙れと叫ぶ余裕もなかった。

「……ちい、速いな、クソ」

ジョブとしての基本ステータスでは侍がバーサーカーにスピードで劣ることなどあり得ないが、彼我のレベル差を考慮すれば素早さの値はほぼ同等……いや、僅かに負けている。ゆえに、少しでも集中を乱せば、

「ぬぐあ……っ！」

即、窮地に陥る。

【ハルバディア】の攻撃が【暁 月光】の鼻先を掠めた。危ない危ない危ない。冷や汗が額から頬に滑り落ちる。下手をすれば今の瞬

間に死んでいた。

ここで【ハルバディア】はいい加減に痺れが切れたのだろうか。レベル5の敵を相手に十分近くも手を拱いているのだから当然と言えば当然だ。ここまでは通常攻撃のみで明らかに舐めプレイとわかる戦い方だったが、拳動が変わった。

【ハルバディア】の斧が唸りを上げる。攻めの手が高速化、増大化し、怒涛の勢いで攻め立ててくる。立て続けの波状攻撃に正常な思考は間に合わず、大和は既にフリーリングとインスピレーションだけで戦っていた。

「ぬ、が、ぐ、ぬぬぬぬ……っ！」

大和の形相はもはや羅刹のそれである。

遠距離から【ハルバディア】が地面に斧を叩きつける。大地が砕け、地割れが津波のように襲来する。とうとう【ハルバディア】はスキルを解禁したらしい。

「ちよっ、まつ、まつ、まつ！」

大和は奇声を上げながら逃げ場を探すが、攻撃範囲が広すぎて安全地帯に逃げ込む時間はなかった。やむを得ず空中へと逃れたところへ、待ってましたとばかりに【ハルバディア】のジャンプ斬りが飛んできた。だがもちろん、これくらいのことには大和も承知のことである。

大和は焦ることなく、【ハルバディア】の攻撃をガードした。

HPの八割が蒸発した。

「ぶふおっ！」

思わず口から何かが噴き出した。間違いなくガードしたのに、このダメージはどういうわけだ、どうなっている。ふざけるなど喚きたい。鬼畜すぎである。

更にそこへ、【ハルバディア】がトドメの奥義を発動。斧を水平に構えて高速回転し、竜巻のような勢いで向かってきた。大和の知識にある技だ。多段ヒットする無敵時間付与の突進技。無論、掠っただけで死ぬ。

逃げ切ることはできない。防御はもはや意味を成さない。
となれば。

「こな、くそ！」

大和は最終手段に出た。それは、すべての攻撃をパリイで凌ぐことである。

パリイとは相手の攻撃を弾いて止め、被ダメージをゼロにするテクニックだが、実行するにはフレーム単位で際どいタイミングを見計らう必要があるためかなり難しい。成功率は限りなく低いが、つべこべ言えるほど大和に選択肢は残されていなかった。

バトルフィールドの端まで下がれるだけ下がり、【ハルバディア】を誘い込む。荒れ狂う暴風が迫る。大和は呼吸も瞬きを止めて機を窺った。

キーン！ と鋭い音が鳴り、【暁 月光】の刀が渦巻く刃を受け止めた。息をつく間はない。防ぎきるしかないのだ。大和は針の穴を通す正確さでボタンを押し、パリイを繰り返す。画面を睨みすぎて眼球の静動脈がピリピリと疼く。霊でも憑りついたかのように背中が重い。なんでこんなに頑張らなくてはいけないのか、心のどこかで疑問に思った。

それでも大和は脳と指を休めない。スピーカーから、キーンキーンキーンキーンと金属音が断続的に流れ続ける。

「……………」
なんか、うまくいきそうなんですけど。

もしかすると、もしかするかもしれない。その事実には誰よりも驚いているのは大和本人に決まっている。もう一度やれと言われてもできるわけがない芸当、今世紀最大かもしれないメガラッキー。今の瞬間、己にはゲームの神が舞い降りたのではなかるうか。

などと、調子に乗った。乗ってしまった。

「よ、よし、このままい」けなかった。

奇跡としか言えない絶妙の連続パリイを続けてきた大和だが、ついにタイミングが狂ってしまった。一瞬の油断が命取りだった。

【ハルバディア】の奥義に巻き込まれた【暁 月光】は無残に切り刻まれ、空へと打ち上げられる。しかし【ハルバディア】の猛攻はやまない。奥義をキャンセルして対空技を繰り出し、宙を舞う【暁 月光】に更なる暴行を加える。超オーバークイルである。憂さ晴らしでもしているのだろうが、もうどうでもよかった。

「……………」
大和はコントローラーを持ったまま机に突っ伏そうとしたが、バランスを崩して椅子ごと床に倒れ込んだ。大の字に仰臥して「はあああああああ……………」と長すぎる溜め息を吐き出す。

「く、久瀬!? しつかりしろ!」

大慌てで桃子が駆け寄ってきた。だが大和は返事するのも億劫だった。

緊張の糸がぶつとりと切れてしまい、その反動で頭は真っ白だ。眉間の辺りがなぜか痛い。悔しさよりも情けなさよりも何よりも虚脱感が勝っている。大和は手足を伸ばしてタコのように脱力した。虚ろな眼で天井を見上げる以外にやることが思いつかない。

「大丈夫か久瀬、どこかおかしいのか? ま、待っている、今から救急車を、いや家の車で直接病院に」

「アホか……………」

大和は仰向けに転がったまま、どこぞへと走り出そうとした桃子をロングスカートの端を掴んで止めた。「きゃあ!」と桃子は跳び退った。

「ああ、悪い…………でも、問題ねえから。ちよつと…………疲れただけだ」
「ほ、ほんとに? 平気なのか? 目が死んだ魚みたいになってるぞ……………」

「フヒハハハ…………心配いらねーって、ハハ、ヒヒヒ…………」
「…………いや、無理。心配。心配だぞ、久瀬……………」

桃子の目つきは危篤の病人でも看ているかのようだった。

なんとも馬鹿馬鹿しい理由で疲労してしまったものだ。むしろ、ゲームでここまで憔悴することができた自分はある意味凄いやうな

気さえる。

「なあ、藤堂……」

「ん？ な、なんだ？」

「俺さあ、確かに負けたけどさあ、メチャクチャ頑張りましたよ。

褒めて。この苦勞をねぎらってちょうだい。お願い」

「……うん、ああ。何をしているのかは正直よくわからなかったけど、あいつと戦っているときの久瀬の横顔は凛々しくてカッコよかったぞ！」

褒める点はそこかよ……と、大和は落胆を禁じえなかったが、桃子の温かい微笑みに元氣付けられ、荒んだ心がちよつと癒されたのだった。

第7話

「それじゃあ、俺あそろそろ帰るわ」

真つ白な灰状態から復帰して数分後、「グラウンド・ゼロ」をしつかりとログアウトしてパソコンの電源を落としたあと、大和はうんと伸びをしながらそう言った。

欠伸を噛み殺しながら背後の壁掛け時計を見遣ると、時刻はもうすぐ八時を回ろうかというところだ。屋敷の外は完全に夜の帳が下りていた。一応、家族から電話が来ていないかどうかケータイをチエックする。着信、なし。大和の親は放任的な育児方針をしているので、帰りがちよつと遅くなつたくらいでいちいち連絡など寄せさないか。

「悪いな、こんな時間まで長居しちまつて」

大和はソファに置きっぱなしだった学生鞆を拾い上げた。

「何を言っている、謝る必要なんてない。わたしの方から久瀬に頼んだんだからな。それより、もう結構な夜分だが、親御さんは心配していないのか？」

「うちの親は放任主義だからな。問題ないさ」

「そうか。だつたら、今日のお礼というわけじゃないけど、久瀬さえ良ければ晩ご飯に招待しようか？」

「晩ご飯……」

桃子の誘いに大和は思い悩んだ。ここが一般家庭ならばお言葉に甘えていたかもしれないが、しかし大和が今いるのは天下の藤堂家のお屋敷なのである。

大和は、ご相伴に預かつた場合の状況を脳内でシミュレートしてみた。

まずはなんといつても食堂の大きさだ。きつと大聖堂みたいな感じの壮大な造りになっているのだらう。そこでは無駄に長細いテーブルが中央に陣取っており、自分はその一隅にせせこましく居場所

を構えるわけだ。なんとかのスープやなんとかのソテーが次から次へと出てきて、自分はナイフとフォークを上手に使うことができずに醜態を晒すことは請け合いである。

そして藤堂家の夕食となれば、当然桃子だけではなく彼女の母も顔を出すのだろう。藤堂光一郎がどうなのかは知らないが。

『あなたが桃子のお友達という、久瀬さんかしら？』

などと、藤堂夫人が話しかけてきたら、どうしよう。『え？ あ

あ……は、はい……』とかなんとかしどろもどろに答えるしかない。

『久瀬……久瀬……うーん、ごめんなさいね、聞き覚えのない苗字だわ。お尋ねしますけれど、あなたのお父様はどのような趣旨の会社を経営しているのかしら？』

『は……？ あ、いや、別に……会社を経営しているわけではないです、俺の親父』

『あら、失礼。そうでしたの。じゃあ、政治経済の分野で活躍されているお方？ それとも医療界や警察機構の方面かしら？』

『いや、その……あの……ふ、普通のサラリ……ン、です』

『え？』

『あ、だから、えっと、普通のサラリーマン……なん、です……すんません』

『……』

『……』

気まずい沈黙である。そんな重苦しい食卓は嫌だ。まあ、藤堂夫人の人格はすべて大和の妄想なのだが。

なににせよ、大和は桃子の提案を断った。

『……まあ、気持ちだけ受け取っておくよ。ありがとな、藤堂。だけど遠慮しとくわ。うちでお袋が晩飯作ってるだろうからさ』

『そうか』

桃子は特に食い下がることなく聞き入れると、「外まで送るよ」と言っただけで先に部屋を出た。するとそこには最初玄関で出会ったあのメイドがいた。扉との位置関係から察するに、この客間を訪ねよう

としていたところらしい。

メイドはいきなり開いた扉に驚いた素振りも見せず、すつと後ろに下がって大和達に会釈をした。

「何か用か？」

「はい。夕食の準備が整いましたので、お嬢様を呼びに参りました。勝手ながら久瀬様のお食事もご用意させていただきましたが、よろしかったでしょうか？」

「いや、わたしもさつき訊いたんだけど、家で家族が待っているからもう帰るそうだ」

「左様でございますか。了解いたしました」

相も変わらず相貌に穏やかな笑みを讃えながら、メイドは大和に物柔らかな視線を向けた。

「久瀬様がご迷惑でなければ、うちの者が車でご自宅へとお送りいたしますが、いかがでしょうか？」

「えっ？ お車つすか……？」

リムジン以外の車種が思い浮かばなかった。そんな高級車に乗っていたら、骨の髄まで庶民派根性が染みついている大和は肩身が狭すぎて嘔吐しかねないだろう。だから、謹んでお断りさせてもらった。

「それでは、恐れながらわたくしも屋敷の外までお見送りさせていただきます。お鞆をどうぞ」

「あ、あ、どうもすみま」

馬鹿正直に鞆を差し出そうとしたところで、大和は思い留まった。自分の心に宿る僅かな漢が訴えかけてくる。「貴様！ またしてもそうやって女性に荷物を押しつける気か！」、と。

「……いや」

大和は浮かせた手を引っ込めた。メイドは両目をぱちくり。

「いやまあ、いいですよ。自分で持ちますとも。女性に荷物を運ばさらわれれ……」

噛んだ。

「は、運ばさせられませんから……」

なんとか言い切ると、メイドは形容し難い苦笑めいた表情を浮かべていた。まさか、これは、己の醜態に笑いを堪えているのだろうか。そう思うと顔から火が出そうになる。

しかし、口を挟んできた桃子によってそれは違うことが判明した。

「久瀬、鞆を持たせてやつてくれないか？」

「はん？」

「彼女は我が家の使用人だ。客人の世話をするのだって務めのうちなんだよ。だから、彼女から仕事を取り上げないでもらえるとありがたい」

「あ、そうなの……」

そんなことを言われたら大和には従うより他になかった。一丁前に恰好などつけた結果がこれである。

「申し訳ございません。ありがとうございます」

メイドは恐縮そうに頭を下げつつ、大和から鞆を受け取った。そして先頭に立って歩き出し、玄関まで来ると来訪時と同様にドアを開けて大和達に通行を促した。月明かりに飾られた夜桜に目を奪われつつ門前まで辿り着くと、見計らったかのように折良く門が開かれた。

数時間ぶりに豪邸の敷居から抜け出すことができた大和は、身体が解放感に包まれていく瞬間を実感した。久々に下界へと降り立った気分だ。珍しくもない平凡な道路が無性に懐かしく映る。

「んじゃあな藤堂、また明日、学校で」

「うん、ばいばい」

軽く別れの挨拶を済ませ、大和は後ろ手を振りながら藤堂家の門先を離れていった。

野良犬の遠吠えに耳を傾けながら、大和は等間隔で配置された街灯に照らされながら家路を急いだ。途中、夜空を仰ぎ見るようして後方を振り返る。もう百メートルは歩いたが、藤堂家の屋敷は視界の中に尚も豪壮な存在感を示していた。改めて眺めると、矢張り半

端じゃなく大きな屋敷である。ついさつきまであの中にいて、日本有数の純正お嬢様と一緒にネットゲームをしていたという過去が、途端に胡散臭く思えてしまった。

とはいえ、暫くはあの家に通わなければならぬのだから、多少なりとも慣れなくてはいけないだろう。

桃子を、彼女の兄に打ち勝てるほどのプレイヤーに育て上げる……果たして、どれだけの日数を費やすことになるのか。現段階では完全に未知数だ。

とまれ、一度頼みを引き受けた手前ちょっとやそつとで音を上げるつもりはない。むしろ念願叶って【グラウンド・ゼロ】をプレイできるのだから、少しでも長く桃子に付き合っていたいというのが正直なところだ。

「……俺も、もっとうまくならねえとなあ」

教示する者が未熟だったら、当然享受する者の伸び白もその程度になってしまう。藤堂光一郎の腕前が如何ほどのものかは不明だが、ネトゲ廃人である以上PCのレベルも本人のプレイヤースキルも生半可なものではないだろう。

「……んー」

考えれば考えるほど、勝ち目の低さが浮き彫りになってしまう。廃人と常人ではゲームに傾ける時間の密度が全然違うのだ。例えば、今この瞬間だってそうだ。桃子が学園に行っている間もそう。桃子が日常生活を送っているときにも、藤堂光一郎は着々と強くなっているのだ。

その差が埋まることは、あるのだろうか？

「いつそのこと野郎の部屋に突貫してアカウントを削除してやれば……いや、ダメか」

ネトゲ廃人にそんなことをしたら自殺しかねない。

「地道にやっついていくしかねえか。まっ、頑張ろうぜ、藤堂」

別れたばかりのクラスメイトの顔を思い浮かべながら、大和は帰路を進んでいく。

腹が、ぐうと鳴った。

第8話

翌日、大和は談合の場を設ける目的も兼ねて、桃子と共に昼食を取っていた。昼休みの喧騒で賑わう教室の窓際、二人は大和の席を挟む形で額を合わせる。

「テクニクももちろんだが、強くなるためには知識も必要だ」

というのは大和の弁だ。この意見に桃子の賛同を貰えたため、今に至った次第である。

「ほら、これ」

大和は弁当箱と一緒に鞆から取り出した数枚のA4用紙を桃子に手渡した。

「これは？」

「俺の知識の範囲内だけど、【グラウンド・ゼロ】の要点を纏めてプリントアウトしておいた。属性の関連性とか、基本的な戦術とかな。実際にやってみないとイマイチわかりにくいだろうけど、まあヒマなときにでも目え通しておいてくれ。何かしらの役に立つだろうから」

「んん、ああ……」

桃子は紙束を神妙な顔つきでぺらぺらと捲りながら、

「これだけの量を、昨日うちに帰ってから書き出してくれたのか？ 大変だっただろう？ ありがとう、久瀬。是非とも参考にさせてもらうよ」

固い面持ちから一転して桃子は笑顔を見せた。

そんな反応を見せた桃子に、大和は「まあ、大したことじゃねえよ」とせいぜいドライに振る舞いながら、内心ではホッとしていた。こんなマニアックなものをわざわざ用意して、ありがた迷惑じゃないかという懸念があったのだ。

一安心したところでお腹が空いた。大和は包みを解いて弁当箱を取り出し、蓋を持ち上げる。梅干しが中央に座した白飯と唐揚げやポ

テトサラダなどのおかず勢が顔を覗かせる。いつも通り、決して手抜きではないがお世辞にも手が込んでいるとは言えない献立である。大和に続いて桃子も弁当箱を覆っていた布を紐解いた。

重箱が登場した。

大和は箸を取り出したポーズのまま目を見張る。それでも一年の頃からクラスメイトなのだから、桃子の弁当が豪勢なくらいは知り得ていた。それでも、こうして眼前に重厚感あふれる重箱を見せつけられたら驚かざるを得ない。

「……つうか、でかくね？」

そう、でかかったからだ。

「そうかな？ いつもと同じくらいの量だけど」

あっけらかんと桃子は言うが、二段重ねの重箱には一人前を優に超える食材がひしめいていた。一段目には見事な三角形を形成しているおにぎりが詰められ、二段目には大和の弁当が残飯か何かに思えるほど豪華絢爛な料理が並んでいる。一目見ただけで大和は唾液の分泌量が増大した。

「いただきます、つと。ん？ どうした久瀬、お前は食べないのか？」

「は？ ああ、おう……」

頷いて、大和は食事に取りかかろうとするが、目の前にこんなご馳走があつては食欲など湧きもしない。もはや大和の意識は桃子の弁当に集中していた。それに気づいたのか、桃子はおにぎりを啜え、そのまま大和と自身の弁当を交互に見据えて、

「食べる？」

と上目遣いで訊いてきた。

そんなに物欲しそうな顔をしていたのだろうか、大和は咳払いを落として気を紛らわせ、数秒間の沈黙を経てから「……食べたいです」と正直に主張した。桃子は「うん、いいぞ」と微笑みながら、大和の方に重箱を押し出した。

「好きなものを取ってくれ。味はわたしが保障する」

それはそうだろう。美味いに決まっている。もしこれが不味かったとしたら、それは大和の味覚が狂っているとしたか思えない。食の神に対する冒瀆である。明日からは食品サンプルでも齧っているのがお似合いだ。

「んじゃあ、いただきます……」

大和はおずおずと箸を伸ばして焼売をひとつ頂戴した。口に放り込むと、天上の味が広がった。軟らかな触感と香ばしい肉汁が舌を刺激する。間違いなく、今までの人生で口にしたどの焼売よりも美味しかった。腹が壊れてもいいからあと百個は食べたい。

「……やばい、俺、今、超、幸せ……」

ほっぺが落ちるとはまさにこのことだ。昨日、夕食の誘いを辞退したのは早計だったか。

「喜んでもらえて何よりだ。もつと食べてもいいぞ」

と桃子が言うので、大和はついうっかり遠慮という言葉を失った。まるで催眠術にでもかかったかのように、次々と桃子の弁当を口に詰め込んでいく。体験したことのない佳味の連続に胃が溶け出しそうだった。頭の中には綺麗なお花畑が咲き誇っている。

正気を取り戻したときには、大和は桃子の弁当を半分近くも平らげてしまっていた。

桃子はてんで怒っていなかったが、それでも大和は謝った。代償として、釣り合いが取れるとは思えないが自分の弁当を差し出すと、桃子はちくわの天麩羅を食べて美味しいと笑った。

大和の暴食が終わって落ち着いた昼食風景を描いていると、桃子は「あ、そうだ」と手を叩いた。

「どした？」

「昨日お前に頼まれていたことを兄貴から聞いていたんだ。忘れてた」

桃子が言っているのは、大和が昨日【グラウンド・ゼロ】のクエストをこなしていたときに話したことだ。

それは、藤堂光一郎が使っているPCの名前を聞き出すことだ。

要は敵情視察である。相手のレベルやジョブ、戦術や装備によって対応策は千差万別異なってくる。情報が、あるのとないのとは大違いなのだ。

「よく教えてくれたな。ぶっちゃけダメ元だったんだけど」
わざわざ情報を提示したところで藤堂光一郎にメリットなどないはずなのだ。

「昨夜、お前が帰ったあと部屋に押しかけたら、名前だけなら教えてくれたんだ。兄貴はわたしが本当に挑戦を受けるとは思ってたかったみたいで、驚いてたな。本人が言うにはサービスのつもりらしい」

「はあん、余裕こいてやがんな。まあいいや。吠え面かせてやる。その驕りが命取りだったと後で後悔するんだな……クク」

「おお、久瀬がちよつと悪い顔に」
調査の足掛かりとしては名前だけでも充分だ。有名なプレイヤーなら掲示板やゲーム内で聞き込みをすれば情報が出回っているだろうし、手応えがなければ、その程度の相手ということである。

「で、なんてニツクネームなんだ？」

「いざよいとつくよみ、だって」

「いざよいとつくよみ？」

十六夜、と、月詠ということだろうか。

まさか【十六夜と月詠】でひとつの名前ではないだろう。これは、【十六夜】と【月詠】というふたつのPCを持っているということだ。が、理由はなんだろう。藤堂光一郎は廃人だ、キャラは一人に絞った方がより入念に育てられるのだから、気分によって使い分けられているとは少々思い難いが、セカンドキャラなのだろうか。

なんにしても、名前を知れたのは大きな一歩だ。今日にでも色々調べてみることにしよう。

それから大和は、プリントに目を通す桃子がしてくる質問に答えながら昼食を消化した。

質疑応答が一段落したときに、大和は頼杖についてさりげなく教

室内を横目で見まわした。何人かのクラスメイト　主に男子、一人だけ女子　がジイツと大和達を眺めていることを把握して、大和はやっぱりかと得心する。さつきから、なんだかやたらと視線を浴びているような気がしていたのだ。もつとも、桃子はまったく勘付いていないようだ。

まあ……、彼らの思惑はなんとなくわかるが。

ちよつと話が戻るけれども、桃子に自分がゲーマーだと教えたのは、共通の友人である大和の幼馴染だった。その幼馴染が言うには、桃子はクラスの男子連中に結構な人気があるらしい。

意外、ではないだろう。頷ける話だ。容姿は整っているし、成績も優秀。お嬢様であることを鼻にかけることもなければ、かといって過剰に謙遜するようなこともなく、誰とでも自然体で分け隔てなく接することができる。

要は、この眼差しの数々は嫉妬の光線なのだろう。

別に意図していたことでもないし思い上がるつもりもないが、こういう扱いを受けるのは存外気分が良いものだった。謎の優越感に浸ることができる。未だかつて味わったことのない心地だ。

大和にちよつとした悪戯心が芽生える。クラスの男子達に向かって、唇をニンヤリとひん曲げた笑みをご覧に入れてみせた。

嫉妬の炎が一斉に殺意へと燃え上がった。

大和はここに、生まれて初めて真の恐怖というものを思い知る。思わず悲鳴を上げそうになったのは自分だけの秘密だ。

第9話

昨日と同じく、放課後は桃子の自宅へと直行した。

さすがに昨日の今日で藤堂家のインパクトを忘却するわけもないので、本日の大和は特に面食らうようなことはなかった。リモートコントロールの門を桃子と並んでくぐり、昨日よりもほんの少しだけ痩せた桜の枝葉を見上げながら、桃色の花びらを踏みしめつつ屋敷を目指す。

玄関の前には今日もメイドが立っていた。

「お帰りなさいませ、桃子お嬢様」

たおやかなお辞儀に柔和な微笑、昨日と一緒だ。桃子が鞆を渡すところも同じで、大和は再現VTRを見ている気分だった。

メイドがこちらにも挨拶をしてきたので、大和は若干どもりながらも言葉を返す。屋敷の外観にはもう圧倒されなくなったが、どうにもこう、彼女みたいな年上で美人でしかもメイドな人に敬われると落ち着かない。背中が痒くなる。

なので、言ってみた。

「あの」

「はい、なにか？」

「別に敬語とか使わなくていいですよ、俺相手に。そんな、大層なお客様ってわけでもないんだし」

「いえ、そういうわけには参りません」

即座に断られた。

「お越しくださったお客様に上も下もございません。そして、わたしは藤堂家に仕える身。その誇りにかけて、お客様を差別して遇することなどはいたしません。ましてや久瀬様は桃子お嬢様のご学友、おもてなしに平生よりも気を入れることはあれど手を抜くなど許されざることです」

真剣な顔つきで一気呵成に捲し立てられた。彼女の笑っている以

外の表情を初めて見た気がする。ここまで言われては口答えなどできるわけもなく、「あ、そっすか……」とすこすこ引き下がるしかないし、手荷物だってなし崩的に預けてしまった。

結局は昨日と変わらない流れだ。屋敷内に入ると桃子は着替えるために自室へと趣き、大和はメイドに連れられて客間へと移動する。前を歩くメイドの背中で揺れる長い三つ編みを眺めているとすぐに目的地に到着し、大和はわざわざ扉をオープンしてもらって中に入った。

さて、今日は昨日のような失態を晒すわけにはいかないなど、大和は全力で待機する覚悟を固める。その、直後。

「あの、久瀬様。少々お時間いただいてもよろしいでしょうか？」という背後からのメイドの声。

「え？ ああ、はあ……なんすか」

予想外なことだった。てつきり、昨日みたいに客間まで送ったら去っていくと思っていた。

「卒爾ながらお尋ねしますが、あなたは桃子お嬢様とどのような関係なのですか？」

もつと予想外だった。

「へ……？ ど、どのような、ゴカンケー？」

大和は慌てる。なぜ出し抜けにそんな、年頃の娘を持った父親のようなことを質問するのだ。もしかして自分は桃子に言い寄る悪い虫だとも思われていたのか。だがしかし、玄関口では大和を非難するような素振りなんて少しも……まさか、桃子の前だからと誤魔化したのか？ 淑やかな笑顔を振り撒いておきながら、仮面の裏ではこのクソ虫をいかようにして拘束し蹂躪し抹殺してやろうかという手筈を構築していたのか？ そして今、その本性を現そうとしているのか……！？

などと大和がみつともなく恐慌状態に陥ると、メイドは怪訝な顔を作って大和の顔を窺おうと一歩前に歩み出る。

「久瀬様？ いかがなさいました？」

「ひっ……」

大和の頬が引きつる。尿道の具合が怪しくなる。

「ちよちよちよ、ちよつと待ってくださいよ！ 俺は別にそんな、藤堂をたぶらかして毒牙にかけようとか、この家の資産を狙っているとか考えてないっすよ！ 八百万の神々に誓ってもいいです！」

「はい？」

メイドはキョトンと瞬きを連射し、謎の弁解を始めた大和を見据える。

「……ああ、申し訳ございません。勘違いをさせてしまったようですね」

すべてを悟った顔でメイドは慇懃深く頭を下げた。

「わたくしは、あなたが邪まな算段を企てているのではないかなどと勘繰っているわけではありません。むしろ、その反対です」

「はん、たい？」

「はい」

メイドは大和を安心させるように大きく頷き、微笑みかけてくる。「桃子お嬢様が屋敷に殿方をお連れするだなんて前代未聞の出来事なのです。しかも二日続けてとなれば、これはもう只事ではありません。我々使用人一同は、実のところ昨日の段階で大変動揺しておりました」

「はあ……」

大和は生返事をするしかない。しかし、そんな態度の大和に反してメイドの面構えは大真面目だ。

「ですから、真偽を確かめたいのです」

「真偽って……俺と、あいつが、恋人であるか否かの？」

「ええ、その通りでございます。……どう、なのですか？」

どうもしない。桃子とはただのクラスメイトで、今は頼み事を受けたからここにいただけだ。自分達はお互い恋愛感情の矢印など伸びてはいない。

その旨を伝えると、メイドはあからさまに落胆してか細い吐息を

漏らした。片手を頬に添えて睫毛を伏せる。

「そうですね……お嬢様もとうとう恋慕の情を傾けるべきお方を得たのではないかと期待させてもらったのですが、残念でなりません。痛恨にございます」

「残念がられても……つうか、昨日の時点で藤堂から連絡がいつてたんじゃねえの？ 今日友達が来るよー、一緒にネトゲやるよー、パソコン準備していてねー、って」

「奥手なお嬢様のこと、冷やかされないようにと持ち出した建前かと思っていました」

「なんというポジティブ……でも、藤堂の性格を踏まえて考えればわかることだろ？ あいつに彼氏ができたら、隠すどころか進んで報告すると思うけどな。その辺、大っぴらな奴だろうから。奥手なんつう単語には縁遠いよ」

「そんなことはありません！ お嬢様は恥じらい深き乙女なのです！」

メイドの目つきが変わった。声音が変わった。雰囲気が変わった。だいたい全部が変貌した。大和は天敵と遭遇した小動物よろしくビクツと萎縮する。ダレコノヒトコワイヨ。

「つていつか、あの……えーっと、あんだ……じゃなくて、メ、メイドさん？」

「あら、そういえばまだ自己紹介をいたしてませんでしたね」

何事もなかったかのように先刻までの調子を取り戻したメイドは、居住まいを正して唇に笑みを乗せ、大和に向かって礼をした。

「僭越ながら名乗らせていただきます。わたくしは、桃子お嬢様の専属使用人を務めさせていただきます、メイドの霧生茜音です」

「霧生さん、ね。ソで霧生さん、さっきの続きを言うけど、もしかしてあんたつて藤堂に恋人ができればいいなあって思ってたの？」

「もちろんです」

何を当たり前のことを言わんばかりに茜音は即答した。

「一生のうちに数年しかない貴重な学生生活、その輝きはまさしく光陰矢の如し、恋愛のひとつも経験しないで何が青春でございましょうか。だのに桃子お嬢様ときたら、もうはや高校二年だというのに浮いた噂の影も見えず、懸想とは無縁の毎日を送ってらっしゃいます……ああ、嘆かわしい」

「……まあ、色恋沙汰なんて本人の意思によってどうにかなるもんじゃないだろ。運命とか巡り合わせとか、そういうのが重要なんじゃないの？ 気長に待ってればあいつだっていつかは」

「何を悠長なことを言っているのです！」

茜音の鬼気迫る迫力に打たれて大和は吹き飛びかける。

「命短し恋せよ乙女……誰かを愛するという感情は何よりも尊く温かく、そして偉大なのです！ 人は生に限りある生き物、ゆえにっ、お嬢様には一秒でも長く深く熱くっ、愛情の潤いに満ちた人生を歩んでもらいたいですっ！」

「……つつても、恋愛するにゃ相方が必要不可欠なわけだな」

「あなたはお嬢様に魅力がないと仰るのですか！」

今度こそ、吹き飛んだ。

「あれほどまでに可愛らしく、純粹で清らかな心を持ち、思い遣りと慈悲深さにあふれたお嬢様のどこに落ち度があるというのです！ どこがダメだというのです！ 言っでご覧なさい！」

「ぐえっ……おい、こら、落ち着け！ 首を絞めにかかるな！」

なんだこの女は。メイド馬鹿か。馬鹿メイドか。ただの馬鹿か。今の今まで頭が固く仕事熱心で慎み深いメイドだと思っていたのに、とんだ思い違いである。この数分で彼女に対する見方が激変した。一周回って五百四十度くらい変わった。

茜音が我に返ったのは、大和が呼吸困難で失神する寸前だった。

「申し訳ございません、少々取り乱してしまいました……」

「おう……、少々ってレベルじゃなかったけどな。別人になってたぞ……」

大和がせいぜいと呼気を整え、茜音がしゅんと俯いているところ

へ、洋服に着替えた桃子がやって来た。

「久瀬、待たせ　ん？　どうかしたのか、二人とも？」

「いや、なんでもねえよ。ちよつと霧生さんと話をしていただけだ」

そう告げると、茜音は何か言いたそうに大和を見たが結局は沈黙を選び、「失礼しました」と頭を低くして客間を後にした。

「なんだ久瀬、わたしがいない間に茜音と仲良くなつたのか」

なぜだか嬉しそうに桃子が言った。

「なんで仲良くなつたと思うんだよ？」

「だって今、茜音のことを霧生さんと呼んだじゃないか。名前を呼ぶことは親睦を深めるための第一歩だろう？」

親睦というか、他にも色々と深まってしまった気もするが、今は黙っておくでしょう。

第10話

大和と桃子が共同でゲームをできる時間は限られているので早速パソコンと向き合い、「グラウンド・ゼロ」の世界にログインした。「あれ？ お前のレベル上がったね？」

大和は【+MOMOT+】のレベルがと変わっていることに気づいた。最後に見たときは確か、「暁 月光」と同じレベル5だったはずなのに、今はなんと16になっている。爆発的成長だ。桃子に聞けば、昨夜は余暇を【+MOMOT+】のレベル上げに当てていたらしい。その成果がこれだ。

「16まで上げたとなると、結構な時間がかかったんじゃないか？」
「んー、そうだな。深夜の二時過ぎくらいまでやっていたと思う」

「二時つて……お前な、翌日が休みだつてんならともかく、今日も明日も学校あんだぞ？ 無茶はすんな。体調崩したらどうすんだ」
「大丈夫、わたしはこれでも体力には自信があるんだ」

桃子はにこりと笑って肘を折り曲げ、高々とガッツポーズを作った。ちよつとした衝撃で折れてしまいそうな細い腕だ。言われてからよく見てみれば、桃子の目の下にはうっすらと隈ができていた。何が体力には自信があるだ。笑わせてくれる。

「うるせえ知るか。とにかく、過度な夜更かしは以後禁止だ。プレイ時間にはちゃんと節度を守ること。それがゲーマーの正しき姿だ。わかったな？」

「でも、わたしは兄貴との実力差を少しでも埋めようと」

「やかましい、デモもパレードもあるか」

反論する桃子を大和は一蹴した。

「お前、これ以上ゲームに心血を注いだりしたら……死ぬぞ？」

「えっ!？」

大和の不吉な予言に桃子は愕然と目を見開いた。

「ど、どうということなんだ久瀬！ わたしはまだ死にたくないぞ…

…」
半泣きの顔で桃子は大和に縋りつく。

「いいか、このまま夜更かしを続けてみる。そしたらどうなると思う」

「え？ 光熱費が嵩む？」

「違うわボケ！ 金持ちのくせにみみっちいこと気にしてんじゃねえよ！ もっと他のことだ！」

「よ、良い子は九時までには寝ると？」
見当違いも甚だしい。

「ええい、察しの悪い……正解は、寝不足になって疲労が蓄積してしまう、だよ。するとどうだ？ お前はそのうち、通学中に過労が祟って意識が朦朧となり、ふらふらと車道に躍り出してしまうだろう。そしてそこに、大型トラックが突っ込んできたらどうなる？」

「……凄く痛い？」

「痛いなんてもんじゃねえよ。お前の体は十メートル以上も吹っ飛ばされて路面に叩きつけられ、血みどろだ。骨はバラバラ、内臓はグチャグチャ、人としての原型を保っていられるかどうかも怪しい」
「!？」

「下手をすれば頭蓋骨ががち割れて脳味噌がはみ出しているかもないや、腹が避けて臓物がこぼれてるかもしれん。ンで、たまたま近くにいる通行人に写メを撮られグロ画像としてネットの掲示板に貼られたり」

「も、もう怖いこと言わないで！」

青褪めた顔で桃子は恐れ戦いた。頭の中で、大和が口にした一部始終を想像してみたのだろう、桃子は自分の両肩を抱きしめてぶるりと震え、唇をわななかせている。

正直、ここまで真に受けられるとは思わなかった。ちょっとした罪悪感に身を焦がされてしまう。だが、今言ったことが実現する可能性は否定できないのだ。

「……とまあ、そういうことさ。俺の忠告は以上だ。まっ、お前が

そんな最期を迎えても構わないってんなら、いいんじゃないの？
毎夜毎晩ゲームに没頭していれば」

「い、嫌だ！　しない、もう夜更かししない！　一生するものか……」

桃子は喧嘩に負けた野良犬みたいに縮こまり、ぶつぶつと呟いている。

効果覲面、作戦成功、だが……いくらなんでも鵜呑みにし過ぎだろう。こんな荒唐無稽な作り話、自分なら鼻で笑っているところだ。純朴すぎるのも考えものである。

気を取り直して、大和達はゲームを再開した。

今日はそれぞれ別行動を取ることにした。桃子は野生のモンスター相手に修行を重ね、大和は【十六夜】と【月詠】について聞き込み調査をする。「はっ」とか「たあ！」とかいう桃子の掛け声を聞きながら、大和はペルフェットの城下町をうろつく。

「……まあ、片っ端に訊いて回るのが一番か」
町中を行き交う大量の人混みの中から、大和は暇そうに突っ立っているPCを選んで話しかけた。

「なあ、ちよつと聞きたいことがあるんだけど、いいか？」

「は？　レベル5の雑魚が俺様に気安くチャットしてんじゃねえよ」
そのPCは捨て台詞を吐いて立ち去った。

「……貴様はいつか殺す」

彼奴のニツクネームを脳髓にしっかりと焼きつけた大和は、次なる回答者を求めて【暁　月光】を練り歩かせる。手当たり次第というのは矢張りダメだ。馬鹿を引き当ててしまうと余計なストレスを抱えることになる。できるだけ、人の良さそうな顔のPCを選抜しよう。実際の性根までは見抜けないが、選考基準において指標くらいにはなるだろう。

そんなことを考えながら、大和は再び一人のPCに接触を図った。
「なあ、ちよつといいかな？」

少量の不安を脳裏に滲ませながら大和は返信のレスを待った。

「いいよ^^ なに？」

「お、なかなか好意的じゃねえか」

大和は相好を崩してキーボードを打鍵する。

「ちよつと人を尋ねたいんだけど、【十六夜】と【月詠】っていうPC知ってる？」

「うん、もちろん。有名だからねw」

「有名？ そんなに凄いのか？」

「んー、俺もまだログインしてから日が浅いからそこまで詳しくはないんだけどさ。その【十六夜】と【月詠】は、いつも二人だけでパーティーを組んでて、戦ってみるとそれはもう尋常じゃないコンビネーションをしていて超強いらしいよ」

「ちよつと待った。【十六夜】と【月詠】を所持しているユーザーは一人なんじゃねえのか？ どうやって同時に操作してるんだよ」

「え、所持しているユーザーが一人つてどうということ？ それぞれを誰かと誰かが操ってるんじゃないの？」

「どうやらこれ以上の情報は聞き出せそうにないようだ。大和は適当に話を切り上げて感謝の意を表明するとその場を離れた。

もっと有力な情報を仕入れるには、それなりに【グラウンド・ゼロ】の造詣が深い奴に狙いを絞った方が良さだろう。となれば必然声をかけるのはレベルの高い者となる。少なくとも100は欲しいところだが。

「ああつ、負けたあ」

なんとも情けない声が横手から発せられた。桃子のパソコンを見みると、巨大な獣型モンスターに敗北した【+MOMO+】が最寄りの復活ポイント。つまりはこの城下町で肉体を再構成されているところだった。

「回復アイテム切れたのか？」

「うん。だからいったん町に戻ろうとしてただけど、敵のシンボルに当たってしまった。ああ、アイテム欄がこんなに寂しく……」

桃子はがっくりと頂垂れた。

【グラウンド・ゼロ】では死亡するとペナルティが発生し、装備していたアイテムを除いてすべてが没収されてしまう。所持金は半減だ。大和や桃子も昨日、なけなしの金品を【ハルバディア】に奪われたばかりである。だから貴重品を手に入れたら、苦勞の果てにダンジョンの最深部まで潜り込みたとえボスが目と鼻の先にいようと即座に撤退して倉庫に預けるのがセオリーだ。引き際を弁えないプレイをしていたら何度泣きを見るかわかったものではない。

「藤堂、回復手段がなくなってから帰るんじゃ遅いだろ。なくなりそうになったら、現在地と町までの距離を計算して余裕があるうちに引き返さないとダメだ」

「そうか……そうだな、わかった。肝に銘じる」

桃子は大和のアドバイスを深く心に刻んだようだった。

「だけど、ほら見てくれ久瀬。また【+MOMO+】のレベルが上がったぞ。これでもう17、わたしと同じ年齢だ。このペースなら今週中には100を突破できそうだな」

「できねーよ」

大和は一刀両断した。

「次レベルに必要な経験値の量、どんどん増えてるだろ？ これ、そのうちとんでもない数字になるから。1レベル上げるのに一週間かかったりするぞ」

「え、でも……わたし昨日、レベル300くらいの人を見かけたぞ？」

「そりゃ中にはいるだろうさ。そういう奴が、廃人って言うんだよ。まあ、ゲームのサービス開始初期から地道にコツコツ積み重ねた奴も数パーセントはいるだろうけど」

「じゃあ兄貴のレベルはどれくらいなんだ？」

「それを今調べてるんだよ」

喋りながらも大和はずっとコントローラーを弄っていた。目標とするレベル100以上のPCを探索しつつ、城下町の中央で棒立ちしている【+MOMO+】の傍らへと近づいていく。フレンド登録

している者同士でしか使えないプレゼントコマンドを選択し、有り金をすべて譲与した。

「ほら、やるよ。はした金だけだな。これでポジション買ってこい」「え、いいのか?」

「いいも悪いも、俺の一番の目的はお前を鍛え上げることだ。その途上で資金が不足したら献上するともさ」

きっぱり告げると桃子は大きな瞳に迷うような色をちらつかせたが、すぐに結論は出たようだ。大輪のヒマワリみたいな笑顔を浮かべて桃子は言う。

「……そうか。ありがとう、お前は優しいな」

「おう、その通りだ。俺の心遣いに感謝して使っただぞ。ハッハッハッ」

と、大和は尊大に笑った。図に乗っているように見せかけて実は単なる照れ隠しである。

「そんなやり取りをしていると、
『もしもし、ちょっとよろしいですか』」

気づかぬ間に近寄っていた、少女の姿のPCが話しかけてきた。

大和はほとんど無意識にマウスカーソルを動かしてその少女の素性を探った。ニツクネームは【アリス】、ジョブはシーフ、そしてレベルは……なんと、216。ラッキーなことにお目当ての魚が向こうから網にかかってくれたようだ。

「ああ、いいぜ。ただ、代わりについていうわけじゃないけど、こっちも聞きたいことがあるんだが……」

「構いませんよ。じゃあ、そちらからお先にどうぞ」

もの凄い速さでレスポンスが返ってきた。【アリス】のマスターは、どうやらかなりタイピングが達者な人間のようだ。

先手を譲られて特に断る理由もなく、大和は有益な情報を期待してキーボードに指を滑らせる。投じるクエスションはもちろん、【十六夜】と【月詠】についてだ。

『伝説さんのことですか?』

『伝説さん……？ どういう意味だ？ 新手のネットスラング？』
『違います。伝説さんとは都市伝説の意。【十六夜】と【月詠】のプレイヤーがあまりにも凄すぎて胡散臭いから、掲示板の住民が揶揄してあだ名した名称です』

『……もうちよつと詳しく』
『【十六夜】と【月詠】は常にコンビを組んで行動しています。その実力たるやまさに獅子奮迅、流麗かつ奇抜な連携で他を圧倒し、凄腕のプレイヤーがパーティーメンバー最大の八人で挑んでも敗北を喫したとのこと。敗れた当人達の中には自信を喪失して引退した者もいるとかいないとか。そして都市伝説と呼ばれる一番の所以は、【十六夜】と【月詠】を一人の人間が同時にコントロールしているという点です』

目を疑った。

『はあああ？ いやいや、いくらなんでもホラ吹きすぎだろ』

『自分に言われても。ただ本人がそういう風に吹聴してるだけなので。真相は謎に包まれています。でも、【十六夜】と【月詠】が桁外れに強いのは本当、自分が直接対峙したことはありませんけど』
「……………」

大和は押し黙るしかなかった。

マウスホイールを回して【アリス】と会話したログを見直す。当たり前だが、そこに書かれていることに変化はない。【十六夜】と【月詠】を制しているのは一人の人間……それが、藤堂光一郎なのか？

そりゃあやろうと思えば実現可能だろうが。別のパソコンと別のアカウントを用意すればいいだけだ。しかしそれは理論上での話である。同時に二体のPCを操るだけでも困難を極めるだろうに、あまつさえ連携の取れた巧みな戦闘をこなすなんて人間業じゃない。どんな目をして、どんな手をして、どんな脳をしているのだ。

「なあ、久瀬。もしかして……兄貴って凄いのか？」

桃子の素朴な疑問に大和は答えられない。【アリス】の発言を信

用するならば、それはもう凄いことなのだが、どうにも現実味を感じられない。大和自身もそれなりのレベルに達しているゲームーである。と自負しているからこそわかるが、普通は一体のPCを御するだけで手一杯なのである。

大和としては【アリス】の話がデマであって欲しいと願わずにはいられない。

もし真実ならば、桃子の勝率など限りなくゼロに等しいだろう。というかゼロだ。むしろマイナスである。彼女に限ったことではなく、大和だって敵う気がまるでしない。

そして可能性云々以前の疑問なのだが、藤堂光一郎は桃子との勝負においても【十六夜】と【月詠】の両方を用いるつもりなのだろうか。そんなの、大馬鹿野郎としか言いようがない。卑怯だ。論外だ。一騎打ち以外は認めるものか。

仏頂面で大和が憶測を巡らせていたら、

『それじゃあ、今度はこつちが質問しても？』

という文が流れ、大和は【アリス】の存在を思い出した。結構な時間待たせていたと思う。大和は急いで『ああ、いいぜ』と打ち込んだ。

『では訊きます』

そして、またしても目を疑った。

『ずばり、あなた達は、久瀬大和さんと藤堂桃子さんですか？』

「.....あ、あつ!？」

ヤクザのような濁声が咽喉奥から押し出された。

なぜ。なんで。なにゆえ。どうしてわかった。桃子に近似したルックスと【TOMOMO】というニックネームから推察したのか？矢張り昨日、全然違うアバターにすべきだと強硬に訴えるべきだったのだ。過去の自分はなんて愚かなのだろう。死んでくれ。

自分のような一般ピープルならともかく、桃子みたいに著名な家筋の者がリアル割れしてしまうなんて、えらいことだ。この一件により桃子がなんらかの形で貶められるようなことがあれば、責任の

一端は大和に帰結する。当然、桃子の両親の怒りは自分へと矛先を向けるだろう。今のうちに首を吊る覚悟をするべきなのか。

「……ん？」

ところで、【アリス】はどうして大和の名前まで知っている。

そんな疑問が浮上した傍らで、桃子がキーボードを叩いていた。

その音に釣られて、大和はなんの気なしに視線をサイドへとシフトする。ディスプレイには【+MOMOT+】の【アリス】に対する送信チャットが綴られていた。

それは、こんな文章だった。

『なんと、どうしてわかつたんだ？ 確かにわたしは藤堂桃子だぞ』

三度、大和は目を疑うこととなった。

「ちよつと藤堂さああん！」

大和は必死の形相で腕を伸ばして体ごと桃子とパソコンの間に割り込んだ。

「わあっ？」

桃子の素っ頓狂な声と軋むような物音を背後に聞きながら、大和は外野フライを追う高校球児よろしく頭から床に滑り込む。

強かに打ちつけた鼻面を押さえながら振り返ると、そこには尻餅をついたような体勢で「いたたたあ……」と腰をさする桃子がいた。どうやら彼女もまた、大和の行動にビックリして椅子ごと倒れてしまったらしい。

とりあえず桃子のことは置いておき、大和は机の縁を掴んで這い上がるように上体を起こした。そして、己の挺身が水泡に帰したことを知る。大和の健闘も虚しく、桃子の個人情報や電子の海へと旅立っていた。

「あああ……」

アンビリーバブル。

これでもう【アリス】は【+MOMOT+】が藤堂桃子であることを確信しただろう。近日中に晒し上げ祭りが開催されてしまうかもしれない。なんということだ。呆けているうちに【アリス】からの

返信も届けられた。『フッフ、企業秘密です』とのことである。やかましいわ。

「……いや、まだだ！ 抗うんだ大和！ この現況に！」

大和は桃子のキーボードを使って訂正状を作成する。先ほどの一文は完全無欠の嘘っぱちであり事実無根の妄言であることを強調したメッセージを送りつけた。

『大丈夫ですよ久瀬さん。別にあなたが心配するようなことにはありませんから』

「んな……っ！ こいつ、こっちの動向を見抜いてやがるっ」

大和は驚きを隠せない。本能に従うまま荒々しくキーボードを乱打する。

『おまえはいつたいたれなんだ！！！！！！』

『自分ですか？ 自分は……さあて、誰だと思えます？ ヒントをくれてやりますから、推察してみてくださいよう』

「ヒントだあ……？」

不安を煽るようなことを言う【アリス】に苛々を募らせながらヒントとやらを待った。演出効果のつもりか、【アリス】はなかなかメッセージを寄越さない。じれったさに、大和の苛立ちは更に加速する。

そして、

『すみません。ちょっと野暮用が入ったので今日はもう引っ込みます。それじゃ、また明日会いましょう』

「うおい待てやこら！」

大和の叫びが相手に聞こえるわけもなく、【アリス】はそそくさとログアウトして【グラウンド・ゼロ】の世界から消失した。

第11話

それから数十分、大和は桃子にくどくどと説教をしていた。ネットに個人情報を経々しく流すものではないと、口を酸っぱくしてその危険性を注意した。床に正座して大和の訓告に耳を傾けていた桃子は半ばボカンとしていたが、どうにか理解してくれたようだった。「つまり、初対面の人にはちゃんと敬語を使いましょうということだな？」

ちつとも理解していなかった。

大和はげんなりと溜め息をつく。【アリス】との対話が始まってからこつち、喋りすぎと考えすぎでやたらと疲れてしまった。昨日といい今といい、なんだ、自分は桃子の家に疲れに来ているのか。

「はあ……、トイレ行ってくる」

口が止まると不意に尿意が襲ってきた。

「どこにあるかわかる？ 案内しようか？」

「いや、場所だけ言ってくればいいよ」

桃子にトイレの在り処を聞いた大和は、単身藤堂家の屋敷を歩いていった。赤い絨毯に煌びやかな照明、数々の骨董品。見れば見るほどリッチな内装である。さすがに昨日よりは耐性がついているけども、しかし慣れたわけではない。一人歩きするにはまだ早かったか。おとなしく桃子についてきてもらえば良かった。

などと悔いているうちにトイレへと辿り着いた。

「……これ、なのか？」

なんと男性用と女性用で別々になっていた。真鍮ノブの上質な木製ドアも便所のそれとは思えず、この向こうに社長室があったとしても違和感はないだろう。一面大理石とかできていたらどうしよう出るものも引っ込んでしまいかもしれない。

恐る恐る扉を開けてみる。意外と普通の見ただ目で大和は胸を撫で下ろした。学園のトイレみたいに小便器と個室で別れていたが、今

更こんなもので驚く大和ではない。

「にしても、誰なんだ？ あの【アリス】とかいう奴は……」

大和は便器の前に移動してズボンのファスナーを下ろす。

百歩譲って【T.M.O.M.O.T.】の正体を推理できたとしても、そこから【暁 月光】から久瀬大和を連想することなど不可能なはずだ。ひよつとして、エスパーか？ そんなわけがない。そうじゃなければ……ハナから桃子と大和が一緒にプレイをしていると知っていた人間という線も考えられる。

「まさかあのメイド……」

ゲーム内での経過を探るために茜音が接近してきた、とか。いや、ないか。彼女もそんなに暇ではあるまい。

排泄を終えた大和は手水場で手を軽く洗い、ジェットタオルで水を払ってからトイレを出ようとしたところで、

「え？」

開こうとした扉が勝手に動き、眼前に迫ってきた。慌てて仰け反り直撃を避けると、廊下側から「おや？」という声が聞こえた。

「すまない、誰かいたようだね。怪我をしてな……ん、君は？」

見覚えがないであろう大和の顔をまじまじと見詰めるのは、フォーマルなスーツを着こなした青年だった。この屋敷の執事だろうか。線の細い長身で、体格も容貌も非常に整っている。凜然とした目つきが精悍さを窺わせるが、柔らかい物腰のおかげで変な威圧感はない。教養の深いジェントルマンみたいな雰囲気を持っている。

「あ、俺は、その……藤堂の友人で」

言いかけ、気づく。この家で藤堂の苗字を持つのは桃子だけではないのだ。

「や、藤堂桃子……さん？ の、友人です」

「友人？ あの子の？ 悪いが、名前を教えてくださいませんか」

訝しげな面持ちで言う青年の要求に応え、大和は速やかに名を名乗った。

「久瀬大和くん、か……初めて聞く名前だね。もしかして、君のこ

となのかな？ 桃子に協力することになったクラスメイトというの
は」

「まあ、はい。そつすね」

返事をしながら、大和はふと疑問にぶち当たる。

どうして彼は、桃子のことを呼び捨てにしたのだろう。使用人が
主の娘を語るには、ちよつと馴れ馴れしすぎる呼称ではないかと思
う。

「なるほど……つまり俺達は、敵対しあう関係にあるようだ」

「……………？」

「悲しいね。もつと違う形で出会えていたら、君と俺は良き友にな
れたかもしれないというのに、どうして我々人間は争わずにいられ
ないのか……それは！ 一つの世でも己の価値とは自ら動き戦い搦
み取るものだからに他ならない！ ゆえに、俺は君達との決闘に全
力を尽くそう！ そして見つけるのだ、戦いの果てで待つ何かを！」
「……………」

大和は顎を落として大口を開き、啞然と目の前の男を眺めること
しかできない。

「久瀬大和くん、すまないが俺は一度戦いとなれば容赦という言葉
を失う。せいぜい桃子を鍛えてくれたまえ。この藤堂光太郎、君達
の奮戦に魂をもって応えることを約束しよう！ では、さらばだ！」

右手の人差し指と薬指を振りかざし、アディオスとでも言いたげ
に彼は颯爽と去っていった。しかし十歩ほどで本来の目的を思い出
したのか、踵を返してトイレに入り、用を足して手を水洗してから、
「では、さらばだ！」

平然と先のシーンをやり直し、威風堂々とした足取りで廊下を闊
歩し大和の視界から消えた。

「……………」

大和はまだ茫然自失から立ち直れていない。ついさっきの出来事
を脳が正しく認識せず、衝撃の新事実にただ立ち尽くすのみである。

これは、まさか、もはや、まことに信じ難いだが。

今の紳士然とした美丈夫が。

廃人で引きこもりでニートの、桃子の兄貴らしい。

「……嘘やん！」

そりゃツツコミも思わず関西弁になるというものだった。

「何が嘘なんだ？」

突然の声に大和の足が床から浮く。振り向いた先では桃子が能天気な顔で大和を見据えている。少しの間呆気に取られていたし、戻ってくるのが遅いから様子を見に来たのだろうか。

「……今な、お前の兄貴に出くわしたんだよ」

「そうなのか？」

桃子は微かに目蓋を持ち上げたが、過剰に驚くようなことはなかった。

「何か話したのか、兄貴と？」

「話した……なんと言うか、凄くアホっぽかった。だけど、超美形だった。なにアレ？ 普通廃人つてもっと暗くてオタク的な感じじゃないの？ なんであんな清涼感あふれるイケメンなんだよ！」
「なんだか無闇やたらと悔しかった。」

仮に藤堂光一郎が赤の他人だったら別に腹立たしくなどないだろう。街中で擦れ違ってもなんとも思わない。絶世の美女と腕を組んで歩いていたとしても爆発しろと祈願するだけだ。だが大和は光一郎の人となりや桃子から聞かされている。重度のゲーマーであることが知っている。大和だってゲーマーだ、凡庸なツラをしたイチ高校生。対して光一郎は財閥のお坊ちゃん、あの見栄える外見である。

同じゲーマーでありながら、この違い。圧倒的なまでの差の開き。大和の覚えた敗北感は果てしない。

「イケメン？ って、兄貴がか？」

しかし、桃子は不審を示した。

「そうだよ、誰がどう見たってテライケメンだったじゃねえか、忌々しいほどに。街角アンケート取ってきてみる、百人中百人が同意するわ」

「別に、平凡な目鼻立ちだろう、兄貴は」

常識でも語るかのような顔つきの桃子は、ジョークをかましているわけでも大和に気を遣っているわけでもなさそうだった。どうやら心から言っているらしい。あれが平凡だったら自分はどうなるんだ。衆目に晒すだけで逮捕されるレベルか。

「なあ、藤堂。お前って美人だよな？」

「な、なに？ いきなりなんの話だ、からかうのはよせ。わたしの顔なんて十人並みもいいところじゃないか」

「……お前、もしかして目が不自由なのか？」

「む、失敬な。先月の身体能力測定では両目とも2・0だったんだぞ。どうだ、凄いだろ」

頬に朱色を残しながら、桃子はえへんと胸を張った。

まさか、桃子の美的感覚は麻痺しているのだろうか。

彼女や光一郎の親ならば、当然父も母も美形であることは予想に難くない。桃子の専属メイドという茜音もかなりの器量だ。昨日見かけた他のメイドや執事も老若男女の違いはあれど美男美女揃いだった。幼少期からそんな環境で育ったために、感性がおかしくなっているのかもしれない。

「……なんだかなあ」

なんとなく、この日は昨日よりも早めに帰った。

第12話

「えーっと、それで……炎属性は水に弱くて土に強い……だっけ？」
「違う、炎が強いのは金属性だ」

「あれえ？ ……あ、ほんとだ」

桃子は裏返しにしていた机上のプリントを捲り、答えを確かめた。昨日渡したばかりの紙束は既に皺が寄っており、桃子が繰り返し熟読したことがわかる。

この日の昼休みも大和と桃子は席を共にして【グラウンド・ゼロ】についての協議を執り行っていた。実際は協議なんて大層なものではなく、桃子の覚えた知識が正しいものか否かをチェックしているだけで、その様は次の授業の予習をしているように見えなくもない。「だけど久瀬、炎が水に弱いのは納得できるけど、金に弱いっていうのはどういう理屈なんだ？ お札は紙だからよく燃えるということか？」

「……いや、この場合の金は貨幣のことじゃなくて金属のことだから、金属は炎で熔ける。だから弱点。そういう話だ」

「炎で熔かすよりも水で錆びつかせた方が早くないか？」

「知らんがな……」

「そもそも金属が熔解するレベルの熱量を炎と分類していいのだから……いや待て、それ以前に、そんな高エネルギーの熱を浴びたら弱点とか関係なく人間は即死するのでは？ 弱点と言えば、水属性が炎属性に有効というのも矛盾している気が……金属を熔かすくらいなら、水なんて一瞬で蒸発してしまうだろうに。ううむ、謎だ」

桃子は顎に手を当てて何やら真剣に考え始めた。その思考を、大和は「おいこら」の一言で断絶する。

「こほん。えー、ちよっといいですかあ藤堂さん？」

「え？ は、はい……」

なんらかの気配を察したのか、桃子は姿勢を正して大和に向き直った。

「ゲームの設定にケチをつけんのはやめろ。ある意味、最大のご法度だぞ。現実性を追求したらキリがねえだろ。魔法を使える時点で変じゃねえかって話になっちまう。ンなもん無粋にも程があるわ」

「程があると言われても……十段階だと、どれくらい？」

「限りなく八に近い九くらいかな。は俺の嫁！と豪語している奴に『それ、ただの絵だから』とリアルを突きつけてるようなもんだ」

「……？ ごめん、もうちょっとわかりやすく」

「デイズニールランドで無垢な子供に『あれ、ただの着ぐるみだから。中身は汗臭いオッサンだから』って言うようなもんかな」

「な、なんて無粋なんだ……っ！」

桃子は己の業を重く受け止め、もう二度と禁忌を侵さぬことをここに誓うのだった。

大和の通う学園では六時限目の後に清掃がある。綺麗にしようがしなかるうが三十分経てば帰れるので、各クラスは必ずと言っていいほど、適当にやる生徒と真面目にやる生徒で二分される。大和はその中間で、適当とも真面目ともつかない微妙な働きをしていた。

大和が担当するのは自分の教室で、主に窓ガラスや黒板の拭き掃除をやっていた。比較的楽なポジションなので、自堕落な連中が「なんもやりたくねー」と駄々をこねている間に立候補しておいたのだ。大和だつて清掃なんか面倒だと思ってるが、やらねばならぬのなら逆に積極的となつて簡単な立場を狙いにかかる。これが知略というものである。

桃子とは出席番号の関係で同じ箇所の担当になつたことはないが、

彼女の性格からして真面目にこなしているのは間違いないだろう。背後の女生徒の怒鳴り声が響いた。箒でチャンバラごっこをしていた男子二人に向かって咆哮しているのだろう。

この時間帯における日常風景なので大和は振り向くこともせず、淡々と自分の仕事を進めていくことにする。さっさと終わらせてホームルームまで窓際で黄昏ていよう。

「よし……終了っ」

最後の窓を拭き終えて、大和はパンパンと手を払い合わせた。後は雑巾を片付けるのみである。と、思っていたのだが。

「あの……ちよつといいですか？」

「んあ？」

真後ろから呼びかけに応じて視線を回すと、そこには小柄な女生徒が立っていた。

「風観……？　なんだ、俺になんか用？」

問いかけに、彼女はこくんと頷いた。

「あなたに大事な話があります」

「大事な話い？」

大和は眉根を寄せた。いきなりなんだというのだろう。あまり驚かないのは、似たような感覚をつい最近経験した覚えがあるからだろうか。一昨日、桃子に話しかけられたときである。しかし桃子とはあのとき、たまにしか話さないような仲だったが、目の前の女生徒は違う。正真正銘、今日初めて声を交わした間柄だ。

風観玲愛。かざみ れあ

二年になつてからクラスが一緒になったので、どのような人間なのかはよく知らない。ただ、陽気なイメージはない。いつも自分の席で一人、ぼつねんと本を読んでいるような奴だ。誰かと話している姿もほとんど見かけないし、人付き合いが下手なのだと思う。

しかし、見てくれだけなら野郎から結構な支持が募るのではないだろうか。

身長百五センチにも満たない矮躯に華奢な体つき、一見すれば

高校生とは到底思えない小ささだ。ややウェーブのかかった髪を短く切り揃え、対照的に長い前髪の奥には大きな黒目が覗いている。だが玲愛の瞳は、大きい割にいつも眠たげな半眼なので、見る者にどんよりとしたイメージを植え付けるのだ。

それでも、総合的な観点からすれば可愛いと評されて然るべきだろう。

あくまでも、可愛い止まりだ。桃子や茜音は美人だが、玲愛はその枠組みには未来永劫含まれないのではなからうか。見た目小学生だから。

さてはて、その玲愛がいつたいなんの用なのだろう。大事な話とは、いかに。

「ゴミを運んでくれませんか？」

まったく大事な話じゃなかった。

玲愛がその小さな手で指差した先には、丸く太ったゴミ袋が壁に寄りかかっていた。大きさはあるが、そんなに重くはないはずだ。教室で出るゴミなどほとんどが紙素材、玲愛の細腕でも容易に持つことができるだろう。

ゴミの数量や重量が玲愛の腕力の許容範囲を上回っているならば手伝ってやるのは各かでもないが、あんなもんをわざわざ代わりに運搬してやるほど大和はお人好しではなかった。

「あのなあ風観……あれくらい自分で運びなさい。すぐに人に頼ってたらロクな大人にならんぞ。いいか、昔の人はこう言った。若いときの苦労は買ってでもしろとだな」

「黙らっしやい」

「へ？」

「あなたの蒞蓄なんて求めてません」

「ほ？」

大和の言葉を遮断した玲愛の声色は、外見に反してとてもクールなものだった。

「御託はいいから、とつとつと運べばよろしい。あなたに選択権はな

いはず。そうじゃないですか？ ねえ……【暁 月光】さん？」
「あ……？」

玲愛の発した言葉の意味をすぐさま咀嚼できない。が、ちょっと間を置けば簡単に理解が追いついた。【アリス】は【暁 月光】が大和だと知っていた。玲愛は大和が【暁 月光】だと知っている。そして昨日去り際に残した『また明日会いましょう』のセリフ。

これらの符号から導き出される答えはただひとつ。

昨日の今日のこのタイミングで、まさか別人であるわけがあるまい。

つまり、

「……………お前かあ つ！」

【アリス】「風観玲愛。降って湧いたような方程式の真実に、大和は鼻の穴を膨らませて食いかかった。しかし玲愛の方はと言えば、いたって冷静な表情で自らの唇に人差し指を添え、片ついと目を閉じる。

「まあ落ち着きなさい。そんなに鼻毛を見せびらかさなくても言いたいことはわかります。……とりあえず、やっちゃった感が満載の厨臭いニツクネームには触れて欲しくないのでしょうか？」

「ちつがああう！ いや、正直違わなくもないけど今ここで口にすべき話題はもつと別のことだろうが！」

「日本経済の明日について？」

「なんで凄い勢いで遠ざかるんだよ！」

「な、なんで凄い勢いで遠ざかるんだよお」

「それは俺の真似かつ？ ええ？」

「ニヤリ」

「……………」

疲れた。

ダメだ。玲愛のペースに吞まれてはいけない。既に吞まれきっている気もするが知ったことか。大和は努めて平静さを取り戻した。

「……………で、結局お前はなんの用なんだ？ 俺を扱き下ろしに来たの

か？」

「とんでもない。自分は久瀬さんと親睦を深めに来たのです。お互い、色々と話したいことがあるでしょう。だからあなたをゴミ捨てのお供に誘ったんじゃないですか」

「誘ったんじゃないですか、とかさも当たり前のように言われてもな。つうか話があんなら、別にここでいいじゃねえか」

「おやおや、なんとという愚鈍。乙女心のわからぬ大タワケですね。ここだと会話の内容が誰かの耳に入る恐れがあるでしょう。あなたはアレですか、人前で平然と下ネタを喋ったりするタイプですか。なんて下品な」

どうしてそこまで言われねばならんのか。

もはや律儀に怒るのも馬鹿らしいので、大和は大人しく玲愛に連れ出されてやった。こっちだって話があるのは確かなのだ。まんまとゴミ袋を持たされてしまったが、まあいいだろう。

第13話

玲愛に引き連れられて足を向けたのは、学園の職員用駐車場の奥にある焼却炉、その手前に位置するゴミ捨て場だ。普段から人が寄り付かない場所だが、少々臭いが厳しいので人目を忍んで告白の舞台にするようなロマンチックなスポットではない。

「さて、と……」

大和は手持ちのゴミ袋をコンクリでできた回収口に放り込んでから、

「ンじゃあそろそろ聞かせてもらおうか、風観。お前の話とやらを」「そうですね……お話するのは全面的に同意なのですが、積もる話は山の如く、語るも聞くも一両日中では到底伝えきれぬ長丁場と相成りますが、よろしいですか？」

「手短に話せ」

「いいでしょう」

いいのかよ、というツツコミは心中に留め、大和は清聴の姿勢を作って玲愛に開口の水を向ける。しかし玲愛はどうにも歯切れが悪く、「何から話せば良いのやら」だの「暫し待つが良いのです」だのとお茶を濁している。何がしたいんだ。

「早くしないとホームルーム始まっちゃうぞ」

大和の忠告に「む」と唇を窄めた玲愛は、長く細い息を吐いて気難しい表情を浮かべた。

「やれやれ、女性が話し辛そうにしているときはいつまででも待つのが男の甲斐性でしょうに」

わざわざ嫌味を前置きしてから、

「久瀬さん。自分の席はあなたの右斜め後ろなんですよ」

「知ってるけど」

「一昨日の昼休み、あなたは藤堂さんとお話をしていましたね？」

そのとき、机がご近所の自分にはその内容が届いていた。藤堂さん

がポケクソお兄様を更生させるため、【グラウンド・ゼロ】をプレイするということを。そして久瀬さんがそれに協力するということを」

「それがなんやねん」

別にクラスメイトに聞かれて困る話じゃない。桃子もそう思っているからこそ白昼から教室で話題を吹っかけてきたのだろうし。

玲愛は大和の声には取り合わず、まるで探偵が犯人を追い詰めるかのような芝居がかった口調で滔々と言う。

「ところが、藤堂さんに相談を持ちかけられた久瀬さんもまた【グラウンド・ゼロ】はやったことがないと言うではないですか。いかに久瀬さんにゲーム慣れしているようにも所詮は未プレイ、序盤の段階における成長の遅延は必至というもの。無論、それは藤堂さんの上達速度にも影響するはず」

「はあ、そうですね」

黙って聞いているのも退屈なので適当に相槌を打ってやる。大和は、玲愛が何を伝えようとしているのかサッパリわからなかった。彼女の言はすべて、既知の事柄を再確認しているだけだ。そこからどんな話題に発展させようというのか。

「久瀬さん」

玲愛の眼差しが一直線に向けられる。ぼやーとしたジト目が気持ち見開かれて映った。

「あなた自身のためにも、引いては藤堂さんのためにも、先達者の知恵と経験談が必要なのではないですか？」

「はー？」

「あなたがどうしても言うのなら、【グラウンド・ゼロ】歴二年と二か月くらいのわたくしこと風観玲愛が、手を貸してあげないこともありません」

右の五指を薄い胸に当て、玲愛は得意顔で己を指し示した。そんな玲愛を、大和は青汁を一気飲みしたような顔で見ている。

ひょっとしてこのチビ女は、暗に、自分を仲間に入れると言って

いるのだろうか。

ひとまず、断って玲愛の反応を調べようと思った。

「別にいらないけど」

「今、なんと？」

「だから、手助けは結構だよ。俺達だけでなんとかやってくんで風観さんは今まで通りにプライベートなタイムを満喫しててくださいい」

「ごほんごほんごほん！……え？ えっ？ なんですか？」

玲愛は懸命な空咳で大和の発言を掻き消し、いかにも聞こえませんでしたという体で耳の横に手の平を立てた。大和は顔を顰めて溜め息を漏らす。

「あのさあ……お前、なに？ 要するに俺達と一緒に【グラウンド・ゼロ】で遊びたいわけ？」

「……」

図星を指したのか、玲愛は口をへの字に結んで身動きを止めた。

「まあ、人によってはそういう捉え方もできるんじゃないですか？

とはいえ実際自分は全然これっぽっちも、そんな意思はありませんでしたけどね？ 純粹な善意に突き動かされた結果に過ぎませんけどね？ 自分、情に厚いんで。義理と人情だけがお友達なんで」

「ふーん。で、本音は？」

「……一緒にやりたいでござる」

俯きがちになりながら、玲愛は蚊の鳴くような声でついに胸の内を明かした。なぜ忍者口調になったのかはわからない。誰にもわからない。たぶん本人もわからないだろう。

「かーっ！ アホくさ！」

大和は頭髪を掻き毟った。

「昨日から散々思わせぶりなことばっか言いやがって、単にゲーム仲間が欲しかっただけかよ！」

なんて回りくどい、かつ馬鹿馬鹿しい。

そりゃあ気持ちわかる。誰だって趣味の同士は持っていたいに

決まっている。だが、インドア派の道楽は他人に打ち明け難いのもまた事実。ネットゲームなんてその最たるものだ。オタクっぽさが満点だし、引きこもり廃人が蔓延る昨今、大っぴらに嗜好を開陳することは難しいだろう。もちろん人それぞれだ。大和なんかは特に気にかけない人種である。が、玲愛は気にかける人種だった。だから白状するのにだいぶ回り道してしまったのだ。

「ったく……こんなことで手間取らせやがって。こんなもん、」一緒にネットゲやるうぜえ！」の一言で済む問題じゃねえか」

「へんつ、誰も彼もがあなたと同じ価値観を抱いていると思わないことですね」

玲愛は拗ねるように口の端を歪めて、開き直すように言い募った。「自慢じゃありませんが、自分は友達がいません。原因は明白。根暗で口下手で人見知りで、そしてネットゲオタ。どうです？ キモいでしょう？ これじゃあ友達がいらないのも頷けるってもんですよ。

あひゃひゃひゃひゃ」

「……なんだ、その自虐ネタに俺はどう対応すればいい」

「笑えばいいと思います」

「笑えねえよ」

「あなたに話しかけるのにもすっげー勇気振り絞りました。頑張つて明るく振舞おうとしました。ネット上だと強気にいけるんですけど、リアルだとどうも……正直、今もいっぱいっぱい。めっちゃテンパってます。漫画なら目が渦巻きになっているくらい」

「さつきからいちいち話の腰を折ったり、こっちの調子を狂わせてくるのはそのせいかな？」

「そうなんです。たくさん失礼なこと言っていると自覚はありますが、それは緊張しているからなので大目に見てください。自分でも何を口走っているのかよくわからないのです。悪意はないんです。許してくださいね、暁で月光な久瀬大和さん」

「……本当に悪意がねえのか、おい」

「もちろん。すべては言葉の綾なのです。それくらいの過失も許容

できないとはなんて度量の狭い。男の風上にも置けませんね。人間としての資産価値を算出したらコンビニ二弁当の消費税程度が関の山でしょう」

「なあ、そろそろ怒っていいの、俺？ 怒るよ、ねえ？」

「なぜそこで怒るのか。ここは、引っ込み思案な少女が一生懸命に人と向かい合おうとする姿に心震わせる場面のはず。久瀬さん……遠慮せずに、萌えてもいいんですよ？」

「萌えるか！ むしろ憤怒の炎が燃え上がるわ！」

「え？ え？ なんですか今の、ダジャレ？ え？ うまいこと言っただつもりなんですか？ あ、すみません気が利かなくて。今から笑いますね。せーの、あははははー」

「……んが、ぐ、ぐぐぐ」

超うぜえ、こいつ。

口下手？ 引っ込み思案？ なんの冗談だ。こんな口の悪い奴のどこがシャイだという。その毒舌は呼吸の如く、常日頃から人をコケにすることだけを生き甲斐にしていると疑わんばかりの淀みない辛辣さ、間違いなく頭の中で嫌いな人間に嫌がらせをしているタイプだ。

「……ところで、久瀬さん」

僅かに呂律が固くなった呼びかけに、大和は「ああんっ？」と憤懣やるかたなく対峙する。

「まだ返事を貰ってませんけど」

「返事なあ？」

「返事です。自分を……同士として迎え入れてくれますか？」

「やあだね。お前みたいなのとつるんでたら胃に穴が開くわ。失せる失せる」

大和は思いつきり迷惑そうに言ってやり、虫を追い払うようにしつと手を振った。今までストレスをプレゼントしてくれた分の、せめてもの仕返しである。どうせ玲愛は飄々と受け流してねちねちと言いつ返してくるのだから、もう知るか。好きなだけ罵ればいい。

こつちだつて徹底抗戦の構えだ。

などと、意気込んでいたのだが。

「……そうですか……そうですね、ごめんなさい」

玲愛は口撃に転じることなく、花が萎れるように肩を落として面を伏せた。「おろ……？」と予想外の展開に大和は目を皿にする。

「うん……まあ、わかってたんですけどね、自分がうざい性格してるって。わかってたんですけど、でも、藤堂さんが……や、なんでもないです」

ぼそぼそとなんか言っているが、音量不足により聴取には至らない。元から小さな玲愛は今、更に縮こまっていて、このままどこかに消え入りそうだった。

「時間を取らせてすみませんでした。今日ここで話したことは忘却の彼方にも放り捨ててください。自分もそうしますんで、それじや」

視線を爪先に向けながら告げ終えると、玲愛は大和の顔を見ようとせぜずに立ち去ろうとする。え、なに、この俺が悪いみたいな空気は。さっきまでクソ生意気だったのになんで急にしおらしくなんの。大和は盛大に混乱した。

とにかく、このままでは据わりが悪い。

罪悪感にも似た自責の念に尻を叩かれ、大和は振り向いた。

「あーっとそういえば！」

喚く。何事かと玲愛が足を止め、こちらに半分だけ顔を向ける。

「グラゼロについて色々調べてたんだよなあ俺！ どっかに情報通な人間はいないかなあ！ それに俺もまだまだまだビギナーだからなあ！ 誰かに助言とかしてもらいたいなあ！ どっかにグラゼロを二年と二か月くらいやっている奴はいないかなあ！ 具体的にはクラストメイトで【アリス】で216で苗字が『か』から始まる奴がいいなあ！ どっかにいないかなあ！？」

我事ながら必死すぎて笑えてきた。大和は恐喝でもしているかのような大声で見え見えの釣り餌をばら撒き、食いつくのを待った。

どうしてこんな婉曲なことをしなくてはならない。『一緒にネットゲヤろうぜえ!』の一言で済む問題ではなかったのか。今になって大和は玲愛の気持ち了幾分汲み取ることができた。素直じゃないのだ。玲愛も、自分も。

程なくして、玲愛が小さく挙手をした。消極的な自己アピールだった。

「……はい、ここにいます」

「そおか! だったら俺達と一緒にやろうぜ、【グラウンド・ゼロ】! 今日からお前も仲間だ! なるほどなあ! わはははははは!」
もうわけがわからん。どうしてこうなった。引っ込みがつかないとはまさにこのことである。

気が触れたかのように馬鹿笑いをする大和を、玲愛は啞然と眺めていた。頭の容体を疑われているのかもしれない。勘弁して欲しかった。自分は自他共に認める常識人なのに。

やがて、玲愛がリアクションを示した。

「はい……よろしくお願いします」

綿を転がすような吐息と共に、玲愛はふわりと微笑んだ。

教室に戻る途中。

「久瀬さん、あなたは悪い女に手玉に取られるタイプですね」

「は? ンだよ急に」

「どれだけ女に非があるうと涙ひとつでコロツと騙され過ぎたことだと清算してしまう、そんな野郎です。事実、先ほどは自分の見事な演技により容易く意見を翻していました。なんて意思が脆い人なのでしょう」

「なあにが演技だよ。消える直前の蠟燭みたいな顔してたくせに」

「あなたこそ、餌に群がる養豚みたいに必死な顔をして、笑いを堪えるのが大変でした」

「けっ、今更どう言い繕ったって無駄だよ。お前の本性は根暗だつてわかってんだからな」

「そうですね。自分はセンチでナイーブな弱い少女なので、今後優しくするよつに。違反するようであれば最低男のレッテルを自分が貼ります」

「……」

やっぱりごめん。けど、まあいいか。

第14話

「えー……と、いうわけで、風観がお前に協力したいと申し出てくれたわけだが……どうだ？ 構わないか？」

ホームルームの終了後、大和はすぐに行動を開始した。本日の授業工程を終えたクラスメイトが三々五々に散っていく中、桃子と玲愛を率いて廊下の最奥にある進路資料室の前まで足を運ぶ。人目につきたくないと玲愛が言うため、無人の場所を選んだのだ。

大和の正面には桃子。隣には玲愛。俯瞰すればちょうどトライアングルとなる立ち位置である。

「風観が？」

桃子の最初に示した感情は驚きだった。それはそうだろう。大和だつてさっきまで同じ顔をしていたのだ。

大和は、とりあえず【アリス】の正体が玲愛であったことを告げ、彼女のような熟練者が仲間になることの多大なメリットを説明したが、桃子としてはそこら辺の事情は割かしどうでもいいようだった。今彼女が気にしているのは、ゲームよりも玲愛そのものようだ。

「えーっと、こうして面と向かって風観と話すのは初めて……だつたかな。それで、本当にいいのか？ 力になつてくれるというのなら、お言葉に甘えるけど」

桃子は問うが、玲愛は答えない。ただ所在なげな面持ちで上目遣いに桃子を見詰めているのみである。

「……おい、訊かれてんぞ。うんとかすんとか言え」
気を利かせて肘で突いてやるが、玲愛はだんまりを決め込んだままだった。強張った表情に丸まった背中、どうにも緊張しているようだ。なぜだろう。大和と対していたときは、話の道筋が乱れてはいたものの無言になるようなことはなかったのに。

「あの……？」

応答のない玲愛を見かねて桃子が呼びかける。玲愛は頼りない視

線を空中に泳がせてから、ようやく口を動かした。

「は……初めてでは、ないです。藤堂さんと、お話しするのは」

「え？ あ、あれ？ そうだった、か？ ごめん」

途端に桃子はうるたえだした。「ちよつと待ってくれ」とこめかみに人差し指を当てて目を瞑り、記憶の糸を手繰る作業に集中している。そんな桃子を、玲愛は相変わらず固い面持ちで呼び止めた。

「覚えてないのは無理ないです。ほんの些細なことばかりでしたから。どれも、会話と言えるほど長いものじゃありませんでしたし」

そう言われて桃子は回顧に耽るのを中止したが、矢張り心当たりは思い出せなかったようで後ろめたそうな顔をしている。玲愛は訥々と語り出した。

曰く、落とした消しゴムを拾ってくれたとか。

曰く、肩についていたゴミを取ってくれたとか。

曰く、次の授業の移動教室を覚えてくれたとか。

本当にどれも些細なエピソードばかりだった。二言三言の発声で終わってしまうような話ばかりだ。しかも桃子は、玲愛の談を聞いても「そんなことあったっけ……」と頭を抱えている。桃子としては特別な親切でやったわけでもなく、当たり前のことをしたただけだろうから記憶が薄いのはやむを得ないだろう。

だが、玲愛の方からすればかなり重要なことだったらしい。

「クラスでも空気みたいな存在だった自分に優しくしてくれたのは、藤堂さんだけでした。あなたとお友達になれたらいいなと、ずっと思っていました……」

玲愛はカメミみたいに首を竦め、ぶらりと下げた両手を頻りに擦り合せている。もじもじ、という効果音が似合いそうだった。

「だから一昨日、【グラウンド・ゼロ】の話が聞こえたときはチャンスだと思って。昨日は、完全に偶然でしたけど、あなたが本当に【グラウンド・ゼロ】を始めたこともわかったから……」

「これを機にお近づきになろうと考えたわけか？」

大和が言葉尻を継いでやると、玲愛は小さく顎を引いた。

更に玲愛から聞いた話によると、前々から桃子に同姓として憧憬めいた感情は持っていたらしい。明るくて男女を問わず人気があり、誰とでも公平に接することができて、それなのにネットゲームをやることを大っぴらに公言している。そんな桃子に理想の自分を重ね、惹かれるところがあつたようだ。人は自分がないものを持つ人にこそ憧れるとはこのことか。

だからこそ、桃子ではなく先に大和へと協力の相談を持ちかけたのだ。順序を逆にしたら、今みたいにしゃちほこばってしまい口々に会話が成立しないだろう。

「だから、その……いいですか？ 自分と、お友達に……」

恋い焦がれた先輩に思いの丈を打ち明ける女子生徒のような風情で玲愛は言う。さっき、この百分の一の可愛げでもあれば、玲愛に対する印象は多少なりとも変わっていたのだろうと大和は思った。

「んー……？ お友達に、かあ」

桃子は考え込むように唸った。難色を示したわけではなさそうだが、どうも思うところがあるようだった。

「あ、だ、ダメですか？ そりゃそうですよ、自分みたいなキモオタがなに夢見てんだ感じですよ……すみません」

「は、何が？」

「え？」

「え？」

会話のキャッチボールが暴投気味になってきたので、大和が審判として球を正しい方向に導いた。とりあえず玲愛には黙ってもらい、桃子の考えを聞かせてもらうことにする。

「いや、友達っていうのは、一方が求め一方が応えることで誕生するものなのかと疑問に思ってる」

「その心は？」

「んーっと、なんだ、『友達にならない？』『はい、なります』という問答を踏まえればその瞬間から友になるわけではないだろう？ 友達っていうのは、互いのことを知って、いいところも悪いところ

るもちゃんと見て、相応の時間をかけて成るものなんじゃないかな」
なんか桃子がクサイことを言っている。大和だったら絶対に素面じゃ吐けないセリフである。そんな言葉を臆面もなく口にできるのは、さすがというかなんというか。正論だと思うので別に横槍を入れるつもりはないが。

それよりも。

桃子の持論に乗っ取るのならば、今、自分と彼女の関係はどの程度の密度なのだろうか。

「それじゃ、あのう、藤堂さんの返事は……？」

おずおずと尋ねる玲愛に桃子は晴れやかな笑みを携えて答える。

「うん、だから風観の希望に軽々しく頷くわけにはいかない。わたしは嫌いな奴を友達と言えるほど心が広くないし、風観が思っているほど褒められた人間じゃないかもしれない。わたしはこれから風観のことを知っていく必要があるし、風観にもわたしのことを知ってもらいたい」

一拍の間を空けてから、

「漠然とした言い分になってしまったけど、これがわたしの返事でいいか？」

「あつ……え、うん、あの……はい」

頬を赤らめて玲愛は囁くように応答した。瞬間、桃子の表情が明度を増す。

「それじゃあ、これからわたしと友達になっていこう」

桃子は玲愛にすつと右手を差し出した。その手を玲愛はおっかなびっくりと眺めている。眺めている。しげしげと眺めている。いつまでも眺めているだけだ。

「……握手だよ。早く応じてやれ。藤堂がアホみたいじゃねえか」

そつと耳打ちすると玲愛は大急ぎで「よ、よろしくお願いします」と両手で包み込んだ。

「うん、よろしく、風観」

「……れ、玲愛」

「ん？」

「すみません。玲愛と、呼んでもらっていいですか。自分もあなたのことを、桃子さんと呼ぶ……呼ば……呼びたい、です。構いませんか？」

「ああ、いいぞ。改めてよろしく、玲愛」

「……はい、桃子さん」

玲愛は目を細めて朗らかに笑った。釣られるように桃子も笑う。そしてそれを一歩離れた場所で見物している大和。なんだろう、この距離感と温度差。妙に居心地が悪い。群れから取り残されたはぐれ羊の気分だ。

「なあ風観、俺も名前で呼んでやろうか？ 玲愛ちゃんって」

「ハア？ 勘弁してくださいよ気色の悪い」

「……」

この日の放課後は三人で藤堂家へと赴いた。

玲愛は大和と違って巨大な屋敷を目の当たりにしても露骨に驚くようなことはなかった。そのときに初めて桃子から聞いた話なのだけれども、これまでに数多くの人間が藤堂家の門をくぐったが大和ほど盛大に慌てふためいた者はそうそういなかったらしく、自分とはとことんまで庶民階級なのだと思います。

本日も場所は客間のだが、昨日までとは異なり机の上で三台のパソコンが横隊を作っている。言わずもがな、桃子が使用人に命じて取り寄せた玲愛の分のパソコンである。

右から桃子、大和、玲愛の順番で並び、三人はそれぞれのパソコンで【クラウド・ゼロ】にログインし、ペルフェットの城下町中央部にある噴水広場にPCを集合させた。

「とまあ、ひとまず集まってはみたものの、今日はどうするかねえ。風観、なんかグッドなアイデアあるか？」

「自分で考えるより早く人に頼るとはなんて主体性のない。ゆとりの代表格みたいな発言ですね、久瀬さん。老婆心ながらあなたの行く末を案じさせてもらいますよ」

ちよつと意見を求めただけなのにえらく毒を吐かれてしまった。なんとという理不尽。

苦虫を噛み潰したような顔つきの大和はさつくり無視して玲愛は桃子に話しかける。

「あの、桃子さん。自分とフレンド登録をしてもらえますか？ 渡したいアイテムがいくつかあるので」

「え、アイテム？」

「はい」

玲愛が提示したアイテムは、一級品の装備だった。パラメーターの上昇値が高いのももちろんのこと、特殊能力までついているものばかりだ。SPの自動回復効果のある銃【ブラウ・フリーユゲル】、すべての属性攻撃のダメージを15%軽減する軽鎧【プラティーンメイル】、移動と攻撃のモーションをスピードアップさせる靴【イダテンブーツ】など、どれもレアリティがAランク以上のものばかりである。

しかし、【グラウンド・ゼロ】では装備可能レベルというものがあって、今の【+MOMO+】では使えないものばかりだった。が、それくらい玲愛は織り込み済みだったようで、装備可能レベルを底上げる【1級ライセンスの書】を三つも用意していた。一回使えばなくなってしまう超激レアの消費アイテムだ。

これを全部、ドーンと寄付するというのか？ 正気の沙汰じゃない。というか羨ましい。

価値をイマイチわかっていない桃子は呑気な顔をしているが、大和はお宝の山に言葉をなくしていた。今鏡を見ればさぞや愉快的な顔が映っていることだろう。

「桃子さんのジョブがガンナーだと昨日わかったので、トレードシヨップを回って買ってきたんです。……あの、どうぞ受け取ってく

「ださい」

「気前のいいことを言っている玲愛だが、桃子は安易に承服しようとはしなかった。」

「いや、でも……なんだかズルくないか？」

「え？ め、迷惑でしたか？」

玲愛の顔色に影が差すのを察して桃子は慌て気味に首を振った。

「そんなことはない。お前の気持ちはとても嬉しいぞ。ただ、これは凄い装備なんだろう？ 自分の力で入手したならともかく、玲愛から貰ってというのはフェアじゃない気が……」

「いいから、素直に受け取っとけ」

大和は口を挟んだ。

「どうせお前の兄貴と戦うに当たってこんぐらいの装備は必須になってくるだろうからな。遅かれ早かれやってやつだ。昨日、俺だってお前に金を渡しただろう？ 程度の差はあるけどそれと同じことだよ」

「だが……」

「人徳は個人の力だろ。折角お前のために風観が用意したんだ、貰ってやれよ」

「……うん、そうだな。玲愛は協力してくれると言ったんだから、わたしが遠慮してはダメだな。有効活用させてもらうよ。ありがとうな、玲愛」

桃子が笑顔でお礼を言うと、玲愛は無表情のままポツと赤くなつてそっぽを向いた。どうやら照れているらしい。

「久瀬さん、ナイスアシスト。ちったあ役に立つじゃないですか。顔に似合わず気が回るんですね」

桃子に向けているものとはまるで違う、不躰な声音で玲愛は囁いた。

「顔に似合わずってのは余計だ。っていうかだな、風観さん。もしかして俺にも素敵なおプレゼントがあったりする？」

「あると思いますか？」

「……ないですよね、そうですよね、うん」

最初から期待してなかったよ馬鹿野郎と、大和は胸中で吐露した。玲愛から頂戴した装備を身につけた【+MOMOT】は見違えるようなステータスとなっていた。もはや【暁 月光】など足元に及んでいないポテンシャルだ。実際に比較すれば、紙相撲の人形の如き矮小な存在だろう。まさに吹けば飛んでしまう。

「ほんじゃあ改めて、今後の課題についてだ」

「またも当て擦られるのは業腹なので、大和は先んじて己の意見を述べた。

「とりあえず、当面の目標はレベル上げでいいと思う。その過程のうちで藤堂のプレイヤースキルも磨かれていくだろう」

「対人戦対策はある程度PCが鍛えられてからでよいと？」

「対人戦つてえよりも対藤堂光一郎対策だな。奴のプレイングスタイルを調べて短所を炙り出し、そこを衝く戦い方を藤堂に仕込む。それが俺達の役目だ」

「なるほど……ああ、そういえば【十六夜】と【月詠】のジョブを教えてませんでしたね。あくまでも掲示板の書き込みを見ただけの二次情報になります、【十六夜】はナイトで【月詠】はシューマン、共にレベルは140前後だそうです」

「となると、当然のように【十六夜】が前衛で立ち回り、【月詠】は後衛から援護しているわけか」

「ですね。遠距離から近距離までこなせるガンナーなら相性は悪くありませんが、諸手を上げられるほど良いわけでもないでしょう。基本的にパラが貧弱ですからね、ガンナー」

「なんにしても一番の肝になるのは藤堂本人のテクだが、現状じゃあレベル差がありすぎる。やっぱ急務となるのは経験値稼ぎだな。レベルが上がりや新たなスキルも覚えるし、戦術の幅も広がる」

「少なくとも奥義のひとつぐらいは習得しておかないと満足なダメージソースを確保できませんからね」

矢のように見解を飛ばし合って談義に熱を入れる大和と玲愛。そ

の傍らで、完全に置いてけぼりを喰らった桃子がぽっーんと指を啜
えていた。蚊帳の外から「あの、わたしも混ぜて……」と訴えるが、
誰の耳にも届かなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2007r/>

【グラウンド・ゼロ】

2011年3月30日22時41分発行